

社会医療法人社団 三思会 創立40周年記念誌



JUNE 2021

SANSHIKAI

40th ANNIVERSARY 1981→2021



社会医療法人社団三思会
創立40周年記念誌



ありがとう 40周年

社会医療法人社団 三思会は、2021年6月1日で創立40周年を迎えました。1981年に東名厚木病院を開院して以来、これまで支えてくださった方々へ感謝を込めて。私たちは、これからも地域の皆様が安心して暮らせる未来を創り続けます。



三思会は地域の頼れる存在として、人に暮らしに寄り添うトータル・ヘルスケアを提供しています

保健施設

東名厚木メディカルサテライトクリニック健診センター
新横浜メディカルサテライト健診センター
Yangon Japan Medical Centre

医療施設

東名厚木病院
とうめい厚木クリニック
東名厚木病院 透析センター
愛川クリニック
とうめい綾瀬腎クリニック

介護・福祉施設

介護老人保健施設 さつきの里あつぎ
介護老人保健施設 なでしこの里リハビリひらつか
複合型施設マザーホーム戸室
多機能型事業所 にじいろ
看護小規模多機能型居宅介護事業 いわしぐも
訪問看護ステーション もみじ
サービス付き高齢者向け住宅 マザーホーム戸室
訪問看護ステーション さつき
東名厚木病院居宅介護支援センター
厚木市南毛利地域包括支援センター

地域住民と共に歩む医療 健康を創り守る医療 待機する医療から行動する医療へ



昭和56年6月に60床にてスタートした当院は、「地域住民と共に歩む医療」「健康を創り守る医療」をスローガンに職員一同「救命救急医療」「地域へ出て行く医療」を実践してまいりました。－中略－「いつでも、どこでも、誰もが、満足する」医療を目指し実践してきました当院は増改築によりその行動の「広さ」と「深さ」とを獲得しうると確信しております。「高機能にして温かな」病院として、病気の「予防から治療」「リハビリから創建運動」へ力強い前進をさらに推しすすめてまいります。

広報誌とうめい 第27号増築記念号より抜粋

三思会の由来

「三思」という語は、現在・過去・未来を意味するといわれています。

論語の公治長篇(こうやちょうへん)の中に、次の記述があります。
季文子(きぶんし)、「三思而後行」熟慮した後、これを行なうこと。

荀子(じゅんし)の中にも次のような記述があります。

「孔子曰、君子有三思、而不可否思也、[略]
是故君子少思長則学、老思死則教、有思窮則施也」

孔子は、「君子には三つの思がある。これは誰もが考えねばならないことである。少年時代に勉学しなければ、大人になって無能者になる。年老いて人に教えてなければ、死んでから慕われることがない。物をもって人に施さなければ、自分が困窮したときには誰も助けてくれない。だから君子は、少年時代には大人になったときのことを思って勉学し、年老いては、自分が死んだときのことを思って人に教え、物を持っているときには、自分が困窮したときのことを思って人に施すのである」と言った。

現在は過去があって、その延長線上に現在があります。現在は過去の存在も引き受けるとともに未来をつくり・規定することもできます。現在は未来に希望と責任をもつわけですし、いずれ未来を現在化して、またその現在を過去にします。

008 三思会経営理念

010 実績・概要

013 ご挨拶

理事長 野村 直樹 / 会長 中 佳一 / 本部長 日野 浩司

019 祝辞

厚木市長 小林 常良 / 厚木医師会長 馬嶋 順子 / 厚木商工会議所会頭 中村 幹夫

025 沿革

035 永年勤続者エピソード集

阿部 京子 / 江原 正恭 / 片岡 令安 / 齊藤 みどり / 佐藤 賢治 / 杉田 章 / 鈴木 禎見 / 瀬川 千恵 / 林 祥子 / 藤原 伸一 / 山内 領紅 / 山本 珠美 / 結城 ゆずか

045 社会医療法人社団三思会創立40周年記念 対談

その不可分な存在と インプロビゼーション

— D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ? —



053 施設紹介

061 地域貢献

三思会杯 / 東厚会納涼祭 / さがみ介護ロボット開発支援センター / 南毛利地域包括支援センター地域活動

066 東厚会 部活・サークル活動

野球部 / 陸上部 / 写真部 / よろず音楽隊 / アクアリウムサークル / フラダンスサークルメケアロハ

071 COVID-19

未知との遭遇

Close Encounters of the COVID kind

080 三思会のトータルヘルスケア —各事業部のこれから—

救急医療・がん治療 / 介護・福祉 / 健診・人間ドック / 透析治療 / 外来総合クリニック

092 10年後の自分へ

096 未来への抱負

中正剛 / 石綿 祐樹 / 武尾 竜平 / 佐伯 健太郎 / 四元 夏織 / 杉山 恵子



100 三思会創立40周年記念プロジェクト

102 三思会検定



40周年記念ロゴマーク

「未来に向かって一致団結」を表現し、17個の○で描いた「0」は17施設を表しています。三思会ロゴと並べても違和感のないようにシンプルにしました。



ロゴデザインを作った人

三思会職員公募 優秀作品
東名厚木メディカルサテライトクリニック
事務部営業グループ 中津川 直弘

三思会 経営理念

1981年6月1日60床の東名厚木病院 創立からスタートした社会医療法人社団 三思会は「社会に貢献する法人」「信頼される法人」「誇りと責任をもてる法人」という理念のもと、「地域完結」の保健・医療・介護・福祉を目指し今まで歩んでまいりました。

超高齢社会の到来が予見される、創立当時の社会状況の中、この地域に必要なことは何かを考え「住民とともに歩む」「健康を創り守る」を目標として定め、また「”待機する”から”行動する”」を行動指針に掲げました。

これらの理念・目標・行動指針が生まれた背景には、三思会創設者達の目に、当時の医療界が旧態依然たる存在として映っていたことがありました。

創設者達が感じていたのは、人々の生活と価値観が多様化しはじめた当時の社会状況において、社会を構成するすべての人々が人間的尊厳を保ち、魂の自立を守り、健康で文化的な生活を享受できるような社会、それを安定的に維持するために必要不可欠な存在である医療が、当時の実状としてその役割を十分に果たせていない、という思いでした。

三思会の歴史とは、創設者達が当時の状況を改善すべく、理念のもと組織を立ち上げ、仲間を得て、社会へ、自らへ、疑問を投げかけ、挑戦し、前進を模索し続けた40年間であったともいえます。

少子高齢化の進展する現代日本において、社会保障制度の観点からも「社会的共通資本」としての保健・医療・介護・福祉の重要性は、さらに高まってきております。いま一度、この「地域」に必要なことは何かを自ら問い直し、法人としての理念のもと挑戦する心を持って前進してまいります。

三思会 理念

社会に貢献する法人

信頼される法人

誇りと責任をもてる法人

三思会施設

保健施設

東名厚木メディカルサテライトクリニック

新横浜メディカルサテライト

Yangon Japan Medical Centre

医療施設

東名厚木病院

とうめい厚木クリニック

東名厚木病院 透析センター

愛川クリニック

とうめい綾瀬腎クリニック

介護・福祉施設

介護老人保健施設 さつきの里あつぎ

介護老人保健施設 なでしこの里 リハビリひらつか

複合型施設マザーホーム戸室

多機能型事業所 にじいろ

看護小規模多機能型居宅介護事業 いわしくも

訪問看護ステーション もみじ

サービス付き高齢者向け住宅 マザーホーム戸室

訪問看護ステーション さつき

東名厚木病院 居宅介護支援センター

厚木市南毛利地域包括支援センター

実績・概要

2020年度 年間データ

法人全体



職員数

1,240名

2021年6月現在



施設数

17施設

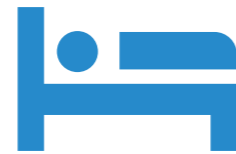
東名厚木病院



救急車搬送台数

4,665台

* 2019年度

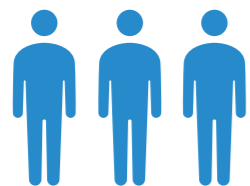


入院数

6,314人

* 2019年度

とうめい厚木クリニック



外来患者数

160,723人

各施設の紹介は、
053ページをご覧ください

介護老人保健施設



平均在床数

90床

さつきの里あつぎ

91床

なでしこの里リハビリ ひらつか

訪問看護ステーション



延べ訪問回数

9,533回

訪問看護ステーション さつき

7,578回

訪問看護ステーション もみじ

透析治療



透析回数

20,891回

東名厚木病院 透析センター

15,385回

愛川クリニック

11,116回

とうめい綾瀬クリニック

健診センター



利用者延べ人数

60,389人

東名厚木メディカルサテライトクリニック

20,284人

新横浜メディカルサテライト

ご挨拶

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY

感謝 – 創立 40 周年 –

社会医療法人社団 三思会 理事長
東名厚木病院 院長

野村 直樹



社会医療法人社団三思会は2021年6月1日、創立40周年を迎えました。地域の皆様、行政の皆様、医療介護福祉関連の皆様ほか本当にたくさんの皆様に支えていただき、成長させていただいた40年間です。この紙面をお借りして心より御礼申し上げます。

1981年6月1日、船子の地に60床の病院として産声を上げた法人です。責任ある地域医療を志し地域から信頼される組織を目指して活動してまいりました。現在は厚木市以外にも海外のミャンマーにおける事業も含め、平塚市、愛川町、綾瀬市、横浜市（新横浜）、相模原市において17か所の事業所を持ち、保健・医療・介護・福祉の事業を展開させていただいています。

日本は超高齢社会を迎えます。2025年には戦後本邦の高度経済成長と復興を支えてきた団塊の世代の方たちが後期高齢者（75歳）となり、2040年、2050年には日本の社会保障が最も脆弱化する時代と予想されています。そして戦後1世紀を迎えることとなります。

また2011年の東日本大震災に代表される多くの災害問題、地球温暖化等の環境問題、そして人類の尊厳を崩壊させた新型コロナウイルス問題、そういった厳しい状況に立ち向かっていかなければならない環境にもあります。

我々はこれらの新しい環境の中で今まで行ってきた医療の原点である救急医療をしっかり担い、また超高齢社会における様々ながん治療、が

ん対策を充実させてまいります。そして、一方で地域包括ケア社会を構成する一員として、医療を含め、保健、介護、福祉分野においても地域のかなめとなって責任ある活動を進めてまいりたいと思います。

記念となる本年度、当法人は80人の新しい仲間を迎えることができました。彼らとともに新しい知識を吸収し、新しい技術を磨き、強くて優しい気持ちで地域の皆様の命と健康を守りお支えしていきたいと思えます。

皆様には今後とも変わらぬご支援ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

小さな志

社会医療法人社団 三思会 会長
中 佳一



医療法人社団三思会は、2021年6月1日創立40周年を迎えることができました。法人は、保健・医療・介護・福祉施設として計17施設を擁し、常勤職員は1000名余りが勤務されております。職場は厚木市を軸に相模原、綾瀬、愛川、横浜、平塚そして海外のミャンマーに存在しております。私は創業者(医師2名、事務職1名)3名の内の1人です。1981年6月1日、私共を含め総勢25名は本厚木駅から約2km離れた見渡す限り田んぼの中にポツンと60床の病院をスタートさせました。

厚木市での開業は私共にとりまして、地縁、血縁、職縁、学縁、知縁等、全くない所での開業でした。この見知らぬ地で小さな「志」を持って開業、チャレンジを開始しました。それは「救命救急」医療でありました。私共は、大学斗争の世代であります。今から半世紀前、大学が相当荒れた時があったと見聞記憶されている方もいらっしゃるかもしれませんが。発端は医学部の問題でありまし

た。当時の医師資格取得制度は、卒業後1年間のインターンを経て、国試に合格して免許を得るというものでした。このインターン制度の廃止運動の中で、医局講座制保持の大学と決別となりました。私共は従来の医局入局とは全く別の医師への道、医師としての人生を求め、心ある諸先輩をたよりに、全国各地、地域で研修を行い地域医療を開拓する、医局講座制コースでない医師人生の選択をしました。当時、大学と一定の距離をおいて地域医療の地歩を築いている所は、全国で中小都市を中心に一定程度ありました。また地方の行政とも上手に連携している所もありました。私は、若気の到りで全くの無関係、未知の所で、かつ都市近郊で「医療」と共に「社会」の動きを実体験できる所を模索し、この厚木で開業することにしました。当時の大学の医療と最も対峙するものとして、また、期待されていたものとして「救命救急」医療を掲げ、「救急医療」に全力投入し、チャレンジしました。代々の職員をはじめ関係

各位の努力と尽力により、私共の「志」は大方の理解をいただき大きく翼を広げ、今日の実績をいただいております。

向後少なくとも、20年間、我が国はさらなる超高齢社会が進行します。今日までの当法人の小史を振り返り、地域包括ケアシステム推進の一つの大きな軸としてさらなる総合的な取り組みを進めていただきたいと思えます。これからは、「待機」から、連携・連帯し「行動する」時代であります。「コロナ禍」は私達に、「面」としての「連帯・連携」が、「リーダーシップ」と共に肝要である事を示しております。三思会は、その大きな枠の中で活躍活動出来る存在である事を期待しております。

20世紀は「革命と戦争」の時代でありました。21世紀はコロナ禍を経て「環境と共生」の真の幕明けの時代の開始であることを願い、老兵は消え去るのみですが、生ある限り法人の活躍を老化に抗しつつ、鳥の目・虫の目・魚の目で見守ることができたらと思えます。

40周年を迎えて

社会医療法人社団 三思会 本部長
日野 浩司



三思会が創立されて40年。1981年は私が大学に入学した年で、ごうろく(昭和56年)豪雪として有名な、日本海側では稀にみる雪の多い年でした。私は雪に埋もれたキャンパスで、びっくりして佇んだことを覚えています。あれから40年、外科を志した私はひたすら走ってきました。三思会も田んぼの中にぽつんと立っていた1号館から(実は1号館だけの時代は知りません。2号館ができたとき、その当時東名厚木病院に来た記憶があります)、現在は1000名を超える皆様が働く場所へと成長しています。月日の流れは早いものだと今更ながら実感しています。

さて、医療から始まり、保健、介護、福祉の分野まで成長した三思会がこれから目指すものは何か、考えてみました。まず、病院・クリニックを中心とした医療は土台です。しかし、現在の医療は、在院日数も短く設定され(私が医師になったころは、大学病院でも平均在院日数は1か月を優に超え、40日、50日だったと記

憶しています。それが今では10日そこそこです。時代の流れを感じます。)、退院後のフォローが重要課題で、それぞれ三思会が運営している介護施設や訪問看護、居宅での管理を総動員して患者さんを見ていく必要があります。まずは、三思会としてしっかりした団結が必要です。ワンチームという言葉が流行りましたが、固いスクラムを組んで前に向かうことが重要になっています。

また、社会医療法人としての立場からは、しっかりとした社会貢献も見据える必要があると感じています。2020年初頭からの新型コロナウイルスの蔓延で社会活動が抑制されましたが、今後我々三思会も“すべての人に健康を”を筆頭とした社会活動を進めていくべきと考えます。ほんの少しの心がけでいいのです。水やエネルギーの節約、ごみを海に捨てない、ひとりひとりの心がけで、でもそれが1000人ならば大きなうねりとなる事でしょう。このような皆さんの気持ちがSDGsにつ

ながり、明日の三思会を創る気が致します。

私の想いは、三思会のデイズニーランド化です。皆さんもデイズニーランドに行ったことがある方は、やはりもう一度行きたい、といった気持ちになったと思えます。きめ細かい気遣いがそんな気持ちを抱かせます。病院などは、なかなかもう一度来たいとは思わない場所ですが、万が一もう一度入院するならば東名厚木病院で、今後みてもらうなら三思会で、と思っただけ、そのような心遣いのできる施設になりたいと思えます。保健、医療、介護、福祉の分野でのデイズニーランド、目指していきませんか。

祝辞

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY

三思会創立 40 周年に寄せて

厚木市長 小林 常良



三思会が創立 40 周年の記念すべき節目を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。貴会は 1981 年の創立以来、「社会に貢献する」「地域に信頼される」「誇りと責任をもてる」の理念のもと、市内のみならず神奈川県、東南アジアにおいて、保健・医療・介護・福祉施設を幅広く展開されてきました。この間、県央地域における地域医療の発展に寄与されるとともに、住民福祉の向上に御尽力をいただいております。永きにわたる貴会の献身的な活動に深甚なる敬意を表するとともに、改めて厚く感謝申し上げます。これまでの 40 年の歩みを振り返りますと、貴会の輝かしい御功績は数多くありますが、とりわけ市内初の訪問介護ステーションや介護老人保健施設の開設、県内初の社会医療法人認可が記憶に残っております。ま

た、2020 年には東名厚木病院が県央医療圏では初となる「神奈川県がん診療連携指定病院」の指定を受けられました。常に新たなチャレンジを続けるそのフロンティア精神は、中佳一会長や野村直樹理事長から関係者の皆様に脈々と受け継がれ、今日の三思会の素晴らしい発展に繋がっているものと確信しております。これからも、県央地域に欠かすことのできない保健・医療・介護・福祉の要として、現場の最前線を走り続けていただきたいと思います。昨年来、私たちの生活は新型コロナウイルスの出現で大きな変化を余儀なくされました。医療現場等にも多大な影響を与え、今なお難しい局面から脱することができていません。新たな感染症の出現により、医療を取り巻く環境は日々厳しさを増しておりますが、力を合わせてこの難局

を乗り越えてまいりましょう。本市が目指す「地域包括ケア社会」の実現には、保健・医療・介護・福祉の各サービスが連動し、切れ目なく提供される環境が不可欠です。超高齢社会が進展する中、地域包括ケア社会を構築するためには、貴会の果たす役割は今後ますます大きなものとなります。誰もが住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるまちを目指し、本市一丸となって取り組んでまいりますので、引き続きのお力添えを賜りますようお願い申し上げます。結びに、三思会が創立 40 周年を契機として一層の御発展を遂げられるとともに、関係者皆様の御健勝を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

創立 40 周年を迎えられるにあたり

厚木医師会 会長
馬嶋 順子



三思会創立 40 周年を迎えられるにあたり、一般社団法人厚木医師会を代表して心よりお祝いを申し上げます。

創立以降、将来を予見する「地域に必要な医療とは何か」を念頭に置いた保健・医療・介護・福祉事業を展開され、あらゆる場面でご尽力いただいておりますことに改めまして感謝を申し上げます。

救急医療をはじめ、地域医療の総合的支援やがん治療にも精力的に取り組まれ、また、傘下には専門性を重視した外来専門クリニックや透析センターなどが置かれ、それぞれが組織内外と連携のうえで地域を支えていらっしゃいます。

県央医療圏は医療資源が乏しく、3 次救急病院のない厚愛地区ですが、東名厚木病院による 24 時間 365 日の救急医療体制のおかげで地域が守られ、厚愛地区の医師会員だけでなく住民にとっても信頼のおける医療機関として不動の地位が築られました。

また、県央医療圏では初めて神奈川県がん診療連携指定病院（神奈川県全体の 4%、12 病院）に指定されま

した。地域の医療機関のみならず、国立がん研究センター中央病院や神奈川県立がんセンターなどのがん診療連携拠点病院とも連携し、質の高いがん医療の提供や患者さん中心の医療が進められています。放射線治療の充実、緩和ケア病棟の開設も相まって、地域のがん医療は格段に好転いたしました。

世界は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により未曾有の脅威を経験しております。2021 年 4 月 20 日の時点で、全世界で 1 億 4 千万を超える人が感染し、300 万人の方が命を落としており、第 2 次世界大戦以降、人類に対する最大の脅威となりました。その最中、新型コロナウイルス重点協力医療機関としてコロナ感染症疑いを含む発熱患者へご対応いただいていることに加え、重点医療機関等がコロナ対応のために救急受入れ困難な時であっても変わらずに外傷・脳梗塞・心筋梗塞等の救急医療を守り続けていただき、厚愛地区だけでなく県央医療圏における急性期病院の役割を果たされています。

介護・福祉事業についても積極的に取り組まれており、高齢者への支

援だけでなく、医療的ケアの必要な重度の障がい者・児に対して広範な支援を行っておられ、高い評価を得ています。

直接的な医療活動に加え、厚愛地区の自治体や医師会関連の会議体の重要メンバーとして、地域医療を根底から支えていただいています。殊更に、理事長兼院長の野村直樹先生には、厚木市地域包括ケア推進会議の会長として厚木包括ケア社会の実現に向けて、そして名誉院長の山下巖先生には、厚木病院協会会長として厚愛地区の病院のまとめ役を担っていただいています。他にもがん検診、厚木医療福祉連絡会、厚愛地区小児等在宅医療連絡会など多くの会議へ、医師のほか多職種の方々も参加され、組織全体で地域に大きく貢献していただいております。

創立 40 周年を迎えられるにあたり、心よりお祝いを申し上げ、県央医療圏の中核として、益々のご発展を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

社会医療法人社団「三思会」創立 40 周年 記念誌発刊に寄せて

厚木商工会議所 会頭
中村 幹夫



社会医療法人社団三思会が創立 40 周年という記念すべき節目の年を迎えられ、この度「創立 40 周年記念誌」を発刊されるに当たりまして、心からお祝いを申し上げます。

また、東名厚木病院開設以来、中住一会長並びに野村直樹理事長をはじめ関係各位のご努力により、医療関係の施設や機能を年々整備拡張され、地域住民の医療の確保と健康増進に多大なご貢献をいただいておりますことに深く感謝申し上げますとともに、各位の熱意とご努力に対しまして、改めて敬意を表する次第でございます。

さて、日本は世界に類を見ないスピードで高齢化が進展し、2007 年に国民の 21%以上が 65 歳という超高齢社会を迎えており、2025 年には 5 人に 1 人が 75 歳以上となる社会が到来することは確実です。我々経済界にとりまして、急激な少子

高齢化により雇用の確保や事業承継が喫緊の課題となっておりますが、地域医療においては、いわゆる「医療介護総合確保推進法」が制定され、一人一人が健やかに生活を送るために各地域において医療・介護を総合的に確保することが求められるようになりました。

こうした中、貴会におかれましては、1993 年には病院併設型としては県内初となる在宅介護支援センターを開設され、その後は、訪問看護ステーションや介護老人保健施設など、介護・看護の整備拡充を積極的に進められました。

また、地域包括ケアシステムの観点からは、2006 年に南毛利地域包括支援センターを開設され、現在は地域包括ケア病棟において在宅や介護施設への復帰に向けた医療や支援を提供されるなど、体制構築に向けて大変なご尽力をいただいております。

このような進取果敢な取組は、まさに貴会が理念に掲げられる「貢献・信頼・誇りと責任」に基づくものであり、厚木商工会議所としても、微力ながら地域医療の環境改善や課題解決に向けて、医工連携という新たな取組を推進してまいりたいと考えております。

結びに当たり、40 周年記念スローガンとして掲げられた「つなぐ・つながる・未来へ」は、まさに今、世界が取り組む持続可能な開発目標（SDGs）に合致するものであり、特に「すべての人に健康と福祉を」を実践される最前線として貴会が創造される未来に大いに期待するとともに、この 40 周年を機に益々ご発展されますことを祈念し祝辞とさせていただきます。

沿革

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY

1979-1990

1979 昭和 54 年

- ・開設構想

1980 昭和 55 年

- ・建築許可 8 月着工

1981 昭和 56 年

- ・東名厚木病院 開設 60 床（一般病床）
- ・救急指定病院
- ・広報誌「とうめい」発行

1982 昭和 57 年

- ・1 号館増改築 100 床
- ・訪問診療開始
- ・事業所健診活動開始
- ・CT スキャン装置導入
- ・互助会「東厚会」発足
- ・職員旅行スタート
- ・とうめい保育室 開設
- ・奨学金制度スタート
- ・厚木市救急輪番制参加

1983 昭和 58 年

- ・訪問看護開始
- ・人間ドック・健診事業開始
- ・関連病院対抗運動会参加

1984 昭和 59 年

- ・医療法人社団三思会認可
- ・検診車導入
- ・健保連・日本病院「人間ドック指定」
- ・産業医活動開始
- ・納涼祭スタート
- ・厚木看護学校講師派遣



1985 昭和 60 年

- ・基準看護Ⅰ類認可

1986 昭和 61 年

- ・人工透析治療開始
- ・海外研修制度スタート

1987 昭和 62 年

- ・2 号館増改築 202 床
- ・院長交代（三科院長）
- ・血管造影装置・全身 CT 導入
- ・レントゲン車導入（第 1 号）
- ・保育棟新設
- ・医療福祉相談室 開設
- ・「健康の日」スタート

1988 昭和 63 年

- ・運動療法施設認定
- ・基準看護特Ⅰ類認可
- ・患者通院バス運行
- ・小児科 開設

1989 昭和 64 年 / 平成 1 年

- ・2 号館人工透析室増改築
- ・脳神経外科 開設
- ・保育棟完成
- ・4 週 5 休制実施

1990 平成 2 年

- ・特Ⅱ類基準看護認可
- ・宮の里クリニック開設
- ・三科院長神奈川県病院協会理事 就任



1991-2000

1991 平成 3 年

- ・中野島整形外科クリニック開業準備

1992 平成 4 年

- ・東名厚木メディカルサテライト開設
総合健診センター・人工透析センター

1993 平成 5 年

- ・東名厚木病院 病床 199 床
- ・特Ⅲ類基準看護認可
- ・MRI 導入
- ・看護学校実習指定病院

1994 平成 6 年

- ・東名厚木病院在宅支援センター 開設
病院として県内初

1995 平成 7 年

- ・ヘリカル CT・DSA 導入
- ・訪問看護ステーションさつき 開設 厚木市初
- ・厚木市内接骨院の先生方（東名会）への
病院ツアー実施

1996 平成 8 年

- ・開放型病院認可

1997 平成 9 年

- ・介護老人保健施設
さつきの里あつぎ 開設 厚木市初
- ・総合健診センター 優良自動化健診施設認定



介護老人保健施設 さつきの里あつぎ

1998 平成 10 年

- ・病院機能評価認定 神奈川県内初
- ・リハビリ庭園完成
- ・病院友の会結成
- ・東名厚木病院ホームページ 開設

1999 平成 11 年

- ・特定医療法人認可
- ・訪問看護ステーションもみじ 開設
- ・医薬分業開始
- ・ヘルパー 2 級養成講座 開始
- ・レントゲン車導入（2号車）

2000 平成 12 年

- ・東名厚木病院在宅介護支援センター 開設
神奈川県第 1 号



訪問看護ステーションもみじ



東名厚木病院 名称の秘密

東名厚木病院 市内では、通称「とうめい病院」と呼ばれているそうです。最初は市内の南部に位置していたので、「南厚木病院」の予定でしたが、たまたま東名高速道路のインターチェンジからすぐの場所であったため、開院直前に「東名厚木病院」という名前に変更されました。

病院のマーク

広報誌「とうめい」の表紙にもあります病院のマークはオレンジ色のプロ野球の球団近鉄バファローズのマークに似ています。

これは、病院 (Hospital) の頭文字「H」を人間の一番大切な「心臓」をイメージして図形化したものです。真心・愛情 (Heart)、親切 (Hospitality)、幸福 (Happiness)、健康・衛生 (Health)、人とのふれあい (Humanity) の頭文字の「H」そして、生命 (いのち) を両掌でおおって慈しむ構図をも意味しています。

広報誌とうめい第 51 号 1991 年 6 月発行 より

2001-2010

2001 平成 13 年

- ・東名厚木病院 3 号館増改築
- ・介護老人保健施設さつきの里あつぎ
デイケア棟増築（定員 30 名→60 名）
- ・人工透析センター3号館2階移転（30床→60床）
- ・健診センター 3 号館 1 階移転
- ・東名厚木病院 開設 20 周年記念パーティー
- ・QC サークル大会
東名厚木病院放射線科大会賞
体験事例優秀賞受賞



2002 平成 14 年

- ・とうめい厚木クリニック 開設
（病院外来部門を独立）
- ・訪看さつき・南毛利地域包括支援センター・
居宅介護支援センター老健施設内移転
- ・さつきの里あつぎ デイケア棟増築
- ・東名厚木病院 電子カルテ導入



東名厚木病院 3 号館

2003 平成 15 年

- ・医師臨床研修指定機関認定
- ・東名厚木病院 ICU 施設認定
増床 199 床→209 床



QC サークル大会
東名厚木病院放射線科大会賞
体験事例優秀賞受賞

2004 平成 16 年

- ・急性期特定入院加算取得・ICU 施設認定
- ・日本医療機能評価機構認定更新 Ver.4.0
- ・オープン型 MRI 導入

2005 平成 17 年

- ・高機能マンモグラフィー導入
- ・東名厚木メディカルサテライトクリニック
人間ドック学会機能評価認定



2006 平成 18 年

- ・厚木市南毛利地域包括支援センター 開設
- ・東名厚木病院 25 周年記念
- ・64 列マルチスライス CT 導入
- ・入院基本料 10:1 届出

2007 平成 19 年

- ・とうめい厚木クリニック新築移転
- ・東名厚木病院居宅介護支援センター
「特定事業所」取得 神奈川県第 1 号



とうめい厚木クリニック新築移転

2008 平成 20 年

- ・総合健診センター移転
- ・病院許可病床 267 床へ

2009 平成 21 年

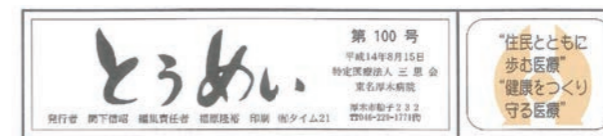
- ・社会医療法人認可
- ・許可病床 267 床
- ・日本医療機能評価機構認定更新 Ver.5.0
- ・入院基本料 7:1 届出



総合健診センター移転

2010 平成 22 年

- ・東名厚木メディカルサテライトクリニック
人間ドック学会機能評価認定更新



題字の秘密

東名厚木病院の開設の数ヶ月前に、「東名厚木病院ニュース」を発行しました。東名厚木病院の建築進捗状況、機能紹介、スタッフ紹介等を壁新聞的に、手書きで作成し、複写機で発行しました。今では、幻の機関誌ですが、「とうめい」発行の原点がここ

にありました。このニュースを発行したスタッフ3名が開設後の機関誌の発行に携わりました。第1回目の編集会議で、機関誌名「とうめい」が決定され、題字を市内で書道教室を主宰している先生にお願いをしました。

広報誌とうめい第 100 号 2002 年 8 月発行 より

2011-2021

2011 平成 23 年

- ・地域医療支援病院認可
- ・東名厚木病院 30 周年記念パーティー
- ・東日本大震災医療チーム派遣
- ・訪看さつき移転

2012 平成 24 年

- ・第 1 回東名厚木 ICLS コース開催
- ・三思会杯
第 1 回厚木市少年ソフトボール大会開催

2013 平成 25 年

- ・愛川クリニック 開設
- ・とうめい厚木クリニック内に
在宅サポートセンター 新設
- ・健診センターに新 MRI (1.5 テスラ) 導入
- ・日本医療機能評価機構認定更新
一般病院 2 3rdG:Ver.1.0
- ・三思会杯
第 1 回厚木市小学生ソフトテニス大会
ミニバスケット大会開催
- ・NPO 法人東南アジア医療支援機構活動開始

2014 平成 26 年

- ・アザラシ型ロボット・パロ
さつきの里あつぎに来所

2015 平成 27 年

- ・新横浜メディカルサテライト 開設
- ・訪問介護事業所 風のみち 開設
- ・厚木市南毛利地域包括支援センター温水移転
- ・愛川クリニックに小児科 開設
- ・東名厚木メディカルサテライトクリニック
人間ドック学会機能評価認定更新



東日本大震災医療チーム派遣



新横浜メディカルサテライト

2016 平成 28 年

- ・複合型施設マザーホーム戸室 開設
多機能型事業所にじいろ
看護小規模多機能型居宅介護事業 いわしぐも
訪問看護ステーション もみじ
サービス付き高齢者向け住宅
マザーホーム戸室
- ・さがみ緑風園 診療部門業務受託開始
- ・さつきの里あつぎ施設内に
厚木在宅サポートクリニック 開設
- ・東名厚木病院 4 号館増改築

2017 平成 29 年

- ・とうめい綾瀬腎クリニック 開設
- ・新電子カルテシステム導入
- ・リニアックによる放射線治療開始
- ・内視鏡センター 開設
- ・化学療法センター 開設
- ・緩和ケア病棟 開設

2018 平成 30 年

- ・日本医療機能評価機構認定更新
一般病院 2 3rdG:Ver.2.0

2019 平成 31 年・令和 1 年

- ・介護老人保健施設
なでしこの里 リハビリひらつか 開設
- ・Yangon Japan Medical Centre 開設

2020 令和 2 年

- ・東名厚木病院 県がん診療連携指定病院に指定

2021 令和 3 年

- ・三思会創立 40 周年



複合型施設マザーホーム戸室



東名厚木病院 4 号館



とうめい綾瀬腎クリニック



介護老人保健施設 なでしこの里 リハビリひらつか



永年勤続者
エピソード集

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY

アナログからデジタルの時代へ

勤続 30 年以上の職員 12 名に、
これまで印象に残っている事をテーマに語っていただきました。

1 名体制

東名厚木病院
診療支援部診療情報管理室
阿部 京子



入職時からずっと私は、東名厚木病院に勤務しています。今の診療情報管理室へは、医事課の入院係から異動しました。その頃は 2 名体制で、紙カルテの管理も行っていたため、製本やコーディングに追われる毎日でした。当時は、1 号館 2 階にある現在の職員食堂の前の休憩室が医局で、その上の 3 階が診療情報管理室でした。

2 年目が過ぎる頃、同僚が退職することになりました。すぐに後任が入ると思っていましたが、いくら待っても誰も来ません。そこで、しばらく 1 名で業務を行うことになりました。紙カルテの保管場所もギリギリだった部屋は、かろうじてカルテを探せるようにはなっていまし

たが、紙カルテであつという間にいっぱいになり、足の踏み場もないくらいでした。

大変な中、さまざまな部署の方から声をかけていただきました。忙しくても辛くなかったのは、周りに支えられたことが大きいと思っています。今では人数も増え、1 名になることは二度とないはずですが、乗り越えたことを忘れずに、元気に続けたいと思います。

入職当時の思い出

理事長室
理事
江原 正恭



私が入職したのは、東名厚木病院が 60 床から 100 床に増床した翌年の昭和 58 (1983) 年でした。多少の社会経験はありましたが、医療については門外漢で、医療現場で交わされる今まで触れたことのない日本語に日々戸惑っていました。医療事務の分厚い本と格闘しながら、会計カード手書き記入による外来会計処理を、患者さんを待たせず如何に短縮するか、同僚と汗を流していたことが懐かしく思い出されます。

当時は、救急隊が受入先病院を苦労して探していましたが、当院ではできる限り積極的に救急患者さんを受け入れていました。輻輳する日常業務、当直、月初めの請求書作成業務と、業務が深夜に及ぶことも多く、限られ

た人員でこなしていくのは決して楽なことではありませんでした。ただ、医療に携わる当時の職員の方々の業務に向けた情熱を肌と感じ、いつも新鮮な感覚で仕事をしていたことを覚えています。昼夜を問わず職員一丸となり、目指す地域医療を実現しようとしていたことが印象に残っています。

先輩の方々、また、その時々に関わってくださった皆様のご尽力により様々なことを乗り越え、現在に至ることができたと思います。地元の皆様のご協力も賜りました。三思会が 40 周年を迎えること、感謝の思いとともに非常に感慨深く思います。

長かった？早かった？ 30年

東名厚木病院
診療技術部放射線技術科 課長
片岡 令安



私の入職は1989年5月、ちょうど昭和から平成になった年です。どのくらい昔かの例えとして、30年前の携帯電話を想像してみてください。当時のそれは、メールもカメラも無い院内PHSのようなもので、むしろ「ポケットベル」の方が多かった時代でした。当時の東名厚木病院は、1・2号館の中に外来と健診センターが存在し、職員数も200名と部署間が近い関係で、何事もみんなで一緒に頑張っていた時代。まさに成長期の時代だったと思います。放射線科は5名。検査機器も一般、X線TV、CT、断層撮影という構成。今のように画像データではなく、X線フィルムを撮影毎に1枚ずつ暗室で現像していました。

当時から救急病院でしたが、夜間の当直は無く呼出し待機でした。待機担当者は毎日交代で、ポケベルを持って帰宅していました。最高記録は、土日で15回呼び出された私が持っています。きっと今後も破られないことでしょう。あれから30年。「スマホ」が主流となった現在、「放射線技術科」と名称を変え、所属職員数は18名。場所も4号館へと移動し、放射線治療装置が導入されるまでになりました。病院も法人も当時より格段に成長した中で、私自身も課長という役職を頂き、今後も地域の皆様のお役に立ちたいと常に考えております。

月1回の棚卸

とうめい厚木クリニック
総務課
斉藤 みどり



20年前、私は薬剤科の事務として所属しておりまして、毎月末、薬剤科から払い出した注射剤や薬剤の棚卸をしていました。各病棟に、病棟薬剤師が配置されていたので、病棟は病棟薬剤師が行い、そのほかの部署を、病棟担当者以外で振り分けておこなっていましたが、日々の業務を行いながらとなると、遅い時間までかかり大変でした。各部署に棚卸用ポータブル端末があれば、数えると同時に入力ができるので簡単かつ楽だったかと思えます。当時はデスクトップパソコンでしたので、各部署に数量だけ記録してもらえばいいように、50音順に品名が書かれた記録紙を配っていました。しかし、品名表示変更

などで記録紙に品名が無い場合もあり、手書き追記をしてもらい、回収してパソコン入力で集計をしていました。また、棚卸時期に向けて在庫を抑えつつ必要量を注文するといった事を行っていたので、大変ではありましたが、それが面白くもありました。現在はどのように行っているのかわかりませんが、電子化し、効率よく行っていることと思います。余談ですが、そんなことで遅くなった日の帰り道、ヘリコプターからサーチライトで照らされることがありました。近くで事件があり、容疑者でも捜しているのか、と思いつつ帰ったことも今では貴重な経験のひとつです。

待望の電子カルテ導入

法人本部管理部
部長
佐藤 賢治



三思会入職は、1989年9月医療事務職として入職。紙カルテ中心の運用でパソコンの普及はごく僅か、行き方知れずのカルテ探しが特技と言えた時代でもありました。そんな中でも2001年の電子カルテ導入に関わられた事が大変印象深い出来事として心に残っています。共同開発により使う側の要望を多分に反映してくれたこのシステムは、2018年に更新するまで使われました。構築のための打合せ、他院視察とオリジナルのスタイルを固める作業は、楽しくもあり苦しくもありました。予

約制の導入で分散した流れに変える作業も一苦勞、複数の患者さんに囲まれながら待合室で時間をかけて説明した事もしばしば。朝早く来ることは日課だから変えられないと・・・パソコンがないと仕事にならない今日、眼鏡と文字サイズを調整せずにはいられない歳となりました。

人生観を変えた一言

法人本部管理部
人事課 課長
杉田 章



私が1991年に放射線技師として東名厚木病院に就職してから、30年という月日が流れました。私がこの法人に長く勤めてこられたのは、ある看護師長さん（当時は看護婦長さん）の一言があったからだと思います。私は子供の頃から、他人とコミュニケーションを取るのがとても苦手でした。さらに頑固な一面もあり、普通の人々が当たり前に行えることが、私にとってはとても困難でした。20代前半、躓いて悩んでばかりいる私にその婦長さんはこう言いました。「放射線技師は放射線技師だけに育てられるのではなく、医師や看護師など色々な職種の人と関わって育てられるのよ」と。

その婦長さんが言った通り、私は病院で働く多くの人達に、時にはかなり厳しく、時には少し優しく育てられ、一人前の社会人になることができました。今は2人の子供を育てる父親でもあります。私は法人に感謝の気持ちしかありません。放射線技師から事務職に転向し、今は人に関わる部署で働いています。職員みんながどうすれば幸せに働けるかを考え、実行することが私の法人への恩返しだと思っています。これからも多くの人と関わり、助け合い、共に成長できたらと思います。

三思会と歩んだ我が人生

第4事業部
統括事務長
鈴木 禎見



1986年12月17日、年の瀬が迫った時期に24歳で転職して35年が経とうとしています。ちょうど西棟(現在の2号館)が出来たときでした。

当時、中院長(現会長)は定期往診をされていて、私はお手伝いをさせていただいたのが最初の仕事でした。

その後健康管理室の立ち上げ、初代レントゲン車の導入(現在の車は3台目)、健診センター(TAMS)として病院から独立、14年間健診の仕事をしていただきました。その後は後輩たちが順調に業務拡大をして現在に至っています。

次の仕事は健診での営業経験を生かして、リクレーターとして全国の看護学校を廻り看護師を集めることでした。北海道から沖縄まで全国行脚をする中で、神奈川県内は元より特に秋田、宮崎、鹿児島、沖縄、高知から

多くの看護師を採用することができました。

13年半で約320人の看護師を採用しました。その甲斐あって2009年に入院基本料7:1を取得することができました。今でも約60人位の看護師が三思会で頑張っています。中には看護主任や課長になって活躍をされ、本当に嬉しい限りです。

三思会は地域へ保健・医療・介護・福祉の総合的サービスを提供することを理念として、常に成長してきました。私はそんな三思会と共に成長させていただいたと思っています。

私はこれからの職業人として残り少ない時間を何とか社会貢献をして終えたいと思います。

思い出す懐かしい光景

愛川クリニック
看護部 課長
瀬川 千恵



私が入職したのは1989年です。長いことお世話になっているとしみじみと思います。

病院内を歩いていると、ふと思出す事がたくさんあります。救急部を立ち上げて数年経った頃、入職して間もない私は早出出勤で7:00に病院に到着しました。裏口は閉まっており、正面玄関も開かず、最終手段としてインターフォンを押し、「勤務に来ました」と必死に叫んだ事がありました。

創立記念日の頃は、夜に病棟から医師に指示をもらうために電話をしても、周囲のカエルの声でちっとも会話が続かなかった事。2号館までしかないのに、病棟編

成を年1回くらい行い、引っ越しを頻回にしていた事。院内配置もたくさん変わりました。今の職員休憩室が医局で、摂食嚥下療法科の部屋が総務課で、ME室のところに内視鏡室と研修室があった事。1階の医局のあたりは、外来のブースと処置室だった事等々。

光景を思い出すと、その中で一緒に働いていた仲間達の顔も思い浮かび、懐かしい気持ちになります。これは、私がずっと心にとめておきたい光景でもあります。

訪問診療との出会い

とうめい厚木クリニック
看護部
林 祥子



私が入職したのは、昭和58年12月、創立2年6ヶ月目の時でした。

当時、東名厚木病院は、内科と外科病棟の2病棟のみでした。最初は内科病棟に勤務し、その後外科へ、そして2号館が出来てからは、脳外科病棟で勤務させて頂きました。病棟勤務が約10年。その後は外来勤務において在宅医療に関わる事になり、訪問診療の準備、同行をさせてもらうようになりました。病棟で働いていたときは、「退院出来て良かったね。」と言うものの、退院後の生活まで考える事が出来ませんでした。

初めて訪問した患者さんは難病で、人工呼吸器をつけて自宅で療養されていました。介護者は奥様です。ご本

人は、住み慣れた自宅で療養できる反面、ご家族は生活のサポートや、医療的なケアを行っていました。主婦の仕事に加え、介護の負担は増えるものの、確かに病院のベッドの上でずっと過ごす事を想像すると辛い気持ちになります。それでも桜の季節になると、介護チームの手助けで花見に行くなど、ご夫婦ともに穏やかに過ごされていました。

訪問診療を通じての学びは、自分の財産となり、私も義理の父を在宅で看取ることが出来ました。多くの人の力に助けられ、37年間楽しく勤務させて頂く事が出来ました。本当にありがとうございます。

入職当時の放射線科

とうめい厚木クリニック
診療技術部放射線科
藤原 伸一



私が東名厚木病院に入職して30年が経ちました。改めて入職してからの事を思い起こしてみましたが、やはり入職して1、2年の頃の忙しかった事が思い出されます。

当初、放射線科は4名程の小規模なものでした。外来も救急も健診センターも同じ建物でしたので、その業務をまとめてこなすのも大変でした。オンコールのみだった夜間帯は当直体制が導入され、私の場合、最初の3か月で一般撮影、CT撮影、TV室検査をたたき込まれ、7月から当直に入ったのを覚えています。当然、不安はありましたが、頼るのは自分しかないし、その状況でしか学ぶ事が出来ない事もありましたので、そこで

頑張れたのはよかったと思っています。また、循環器と脳外科も充実され、脳アンギオや心臓カテーテルも導入されました。まだ専用装置ではありませんでしたので、色々な工夫をし、体を張ってやっていたのを覚えています。週2回あった当直の明けは、お昼までの勤務で、午後はその検査を対応してやっと帰宅と、その繰り返しの中で頑張った記憶は何十年経った今でも蘇ってきます。デジタルではないアナログの世代からやり続けてきた事を今は誇りに思える日々です。

背中

法人本部管理部
人事・リクルート課 課長

山内 領紅



1987年5月に入職し、35年目。現部署の管理部への配属をきっかけに、断捨離を始めています。学会誌などセピア色の資料の中に、「あれっ？」と目を引いた写真を見つけました。1歳前後の長男がベビーサークルの中で柵につかまり立ちをしているワンシーン。まだおぼつかない様子で立っているベビーベッドの設置場所は、なんと健康管理センターの事務所内！

ワークライフバランスという概念もなく、出産を機に退職するのが当たり前だった昭和から平成の変わり目の頃、産後6ヵ月で職場復帰。健診と在宅を兼任していました。当時、保育室はお盆休みでも医療現場は忙しい盛りで、職員には出てほしい。そこで事務所に子供を預け、働いていたのでしょう。今では考えられない光景ですね。

育児と仕事の両立に迷った時、当時の理事長であった中会長に「子供は親の背中を見て育ちます」と励まされ、入職時の思いに立ち返り、地域医療に取り組んでいくと覚悟を新たにした日を思い出しました。令和となった今、三思会と共に子供たちも成長しました。事業の立ち上げ等、様々なことにもチャレンジさせて頂きました。これまで支えて下さいました方々に感謝し、セカンドキャリアを見据えていよいよ集大成に入ります。

私が永年勤続できた理由

東名厚木病院
看護部救急外来ケアワーカー

山本 珠美



私は、ケアワーカーとして東名厚木病院に入職し、1997年から常勤職員になりました。病院勤務は初めての経験で、この世界に飛び込みました。

透析室からはじまり、中材、看護検査科を経て、現在の救急外来（看護検査科と救急が合併）へといたります。当時の課長や主任が、何も分からない私のことを一から教えてくれて、ケアワーカーとして、そして病院職員として育ててくれました。

今でも忘れられない一番心に響いた言葉は、物音に敏感でない私に【音】に敏感になるということでした。患者さんが物を落とし、それを拾おうとして転落をしてし

まうことや、もしかしたら体調が悪くて物を落としたのかもしれないと考えなければいけません。【音】ひとつとっても、見逃してはいけない大事なことでした。

また、色々失敗しても、その都度アドバイスをいただきました。この経験の積み重ねが糧となって、今の私があります。遅咲きの私ですが、スタッフの温かい優しさを胸に、素敵な社会人、そして東名厚木病院のケアワーカーとして、患者さんへのおもてなしが出来るよう、これからも成長し続け、恩返しをしていきたいと思ひます。

40周年おめでとうございます！

とうめい綾瀬腎クリニック
事務部

結城 ゆずか



まずは、記念すべき冊子に寄稿させて頂けること、感謝と共に、入職時には自分がまさか、勤続30年以上の内の1名に入るとは想もしておらず、改めて時の流れに驚愕しております。

執筆にあたり、ここ40年間の国内外の歴史、三思会のあゆみを調べました。昭和、平成、令和、1980年代から2020年代、各年のトップニュース、と共に思い出す当時の仕事… ミレニアムに着工された3号館、日韓FIFAワールドカップの年に電子カルテ導入、その後の代替わり、上野動物園シャンシャンの年に4号館新築、病床増加、新たな認可認定、世界各地の紛争や自然災害は今も爪痕を残し、全人類がコロナウイルスとの

闘いに直面… 少し調べただけでも、印象的なことを絞り込むのは困難でした。

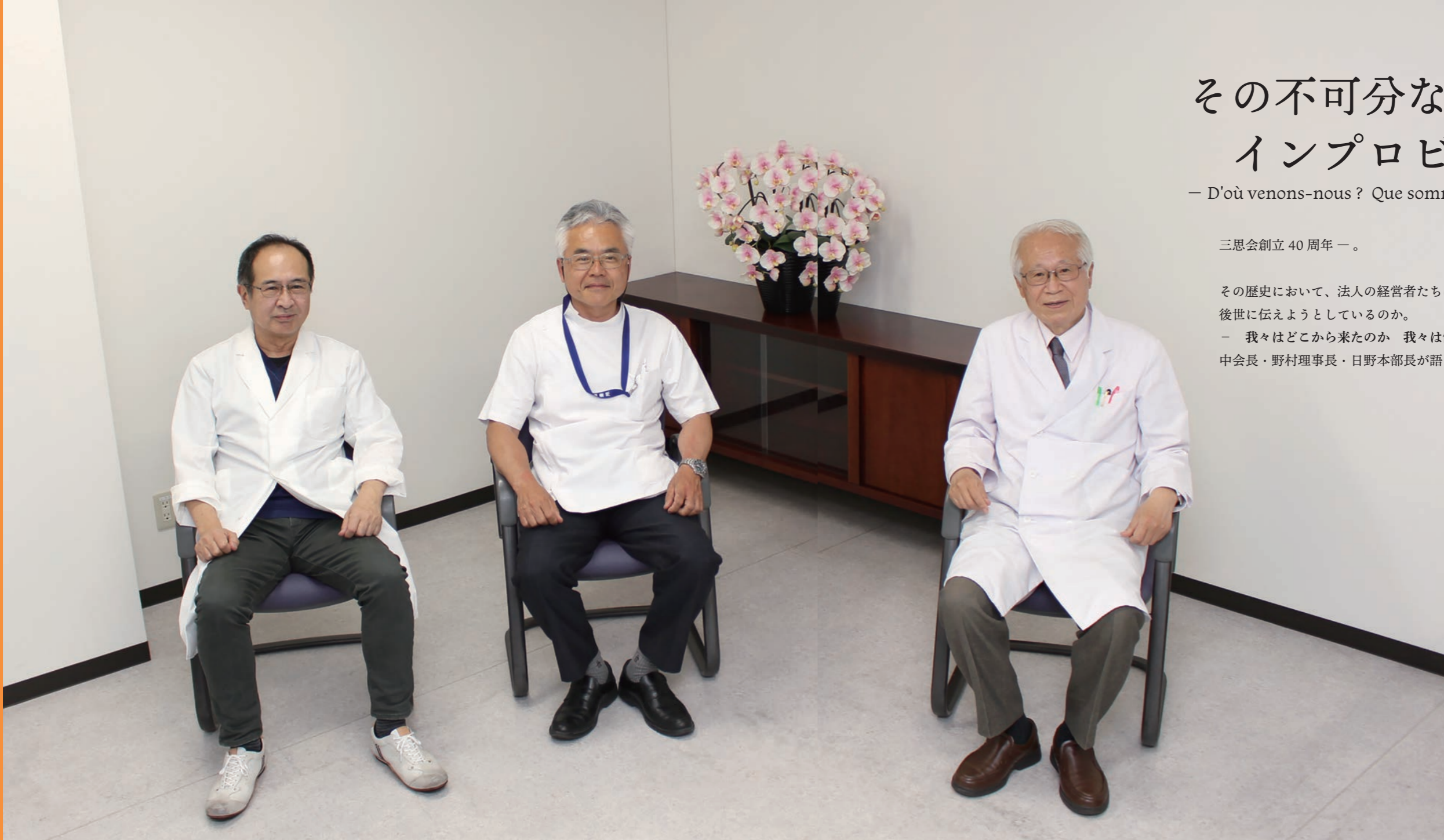
改めて、三思会の功績に微力ながら貢献できたか？と考えております。更に、80周年記念冊子の内容はどうなっているのか、どんな寄稿がされているか、今後の活躍と発展に向けて何をしましょう？と、期待しております。

今は、第4事業部とうめい綾瀬腎クリニックに勤務しておりますが、西に臨む大山と富士山の眺めは入職時と変わらず、「今日もがんばろう！」と言ってくれています。

社会医療法人社団 三思会
創立40周年記念

対談

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY



その不可分な存在と インプロビゼーション

— D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous? —

三思会創立40周年—。

その歴史において、法人の経営者たちは何を思い、何を考え、何を継承し、何を後世に伝えようとしているのか。

— 我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか —
中会長・野村理事長・日野本部長が語る。

本部長

日野 浩司

Koji Hino

1987年 富山医科薬科大学（現・富山大学）医学部卒業後、同大学病院第二外科（消化器外科）入局。県立がんセンター新潟病院等を経て、2008年より東名厚木病院勤務。乳腺外科・緩和ケア治療に携わり、2020年より法人本部長。

理事長

野村 直樹

Naoki Nomura

1985年 富山医科薬科大学（現・富山大学）医学部卒業後、同大学病院第二外科（消化器外科）入局。1996年より東名厚木病院で勤務。外来部門であるとうめい厚木クリニック院長を経て、2017年から社会医療法人社団三思会理事長、2021年より東名厚木病院院長。

会長

中 佳一

Yoshikazu Naka

1969年 東京大学 医学部卒業後、長野県佐久市立浅間総合病院、結研、癌研、ゆきぐに大和総合病院等を経て、1981年三思会開設。東名厚木病院 理事長・院長。2017年より同会会長。日本病院会名誉会員。

— 三思会との関わりや出会いについて お聞かせください

野村 私と三思会との関わりは、1988年に遡ります。当時、私は富山医科薬科大学（現 富山大学）医学部第二外科に所属しており、医局から東名厚木病院へ初めての派遣医師として厚木の地を踏みました。当時、東名厚木病院は2号館が増築されてから間もない時期であり、とても綺麗な病棟で仕事をしていたことを覚えています。

中 私と富山医科薬科大学第二外科とのご縁



1981年創立当時の東名厚木病院

地域医療との出会い

は、実は三思会の創立前からスタートしています。私が新潟県南魚沼市で医師として地域医療の修練に励んでいた時期、一人の外科医との出会いがありました。当時、新潟大学に所属されておりました藤巻雅夫先生です。藤巻先生が後に富山医科薬科大学第二外科の教授となられて、そのご縁があり私が東名厚木病院を開設した後、医局員の先生方を派遣して頂くようになりました。

日野 私は2008年に三思会に入職しましたが、実は1988年に一度当院を訪れています。野村先生は学生時代からの先輩であり、先輩の研修先として見学に来ました。当時は病院の周りに建物はほとんどなく、とても広々とした場所で医療をしているな、という印象を持ったことを覚えて

ています。

中 1981年6月に60床の当院が出来た時は、それこそ周りには水田だけで、他には何もありませんでした。この地で「救命救急」医療を行うことを志し建てた病院でしたので、これくらい周りに何もなければ、もし救急搬送が多くなり救急車のサイレンが鳴る機会が多くなっても、周りの地域住民の方の御迷惑にはならないかな、と感じたことを思い出します。近い将来、病院を発展させて、この一面の土地におさまりきれないくらいに組織を大きくしたいと夢想していました。そして開院してからは、病院に寝泊まりするような生活が始まりました。最初の3か月間は、ほとんど家に帰らずに救急医療・地域医療に没頭していました。

— 中会長との出会いについて お聞かせください

野村 1988年に東名厚木病院に来る前は、私は外科医として半年間毎に勤務する病院が変わるような研修を行っていました。それぞれの病院で魅力的な先生方にお会いしましたが、中先生とお会いし「地域医療」という考え方に触れた時、新鮮なものを感じました。患者さんや地域の方と身近な関係のなかで医療を行っていくということは、自分の理想とする医療と近いのではないかと感じました。

中 野村先生は初めて会ったときから強い意志と思いを感じる人でした。力強い、深くて広い眼差しを持っていたことを記憶しています。

印象的なエピソードとしては、

当時、野村先生から結婚を考えている人がいるということを知り、「機会があれば、一度会ってみたい」と、ほんの軽い気持ちで伝えたところ、翌日にそのお相手の方と二人で一緒に私のところにやってきてくれました。これほど素早く行動に移す人間は中々いないな、と驚いたことを覚えています。

野村 私は、そのエピソードは覚えていませんね(笑)。しかしながら、患者さんに対してだけではなく、人の希望には出来るだけ早く答えたいという気持ちが強かったのかもしれない。

日野 私は2008年に入職した際、中先生と正式にお会いしました。ご挨拶をするために先生のお部屋を訪れたのですが、挨拶もそこそこに「日野先生は経営と診療とどちらに力を入れて働きたいですか」と聞かれたことを思い出します。いきなりのご少しばびびっくりしましたが、とても印象深い初対面でした。

中 野村先生をはじめ医局の関係の先生方からも、日野先生のお話は聞いていました。先生が入職されて三思会としてはまだまだ発展段階であった部分、特

に在宅医療や緩和ケアの分野を推進して頂きました。

— 経営との関わりについて お聞かせください

野村 外科医としての仕事を続け、本当に365日・24時間がん治療のことを考えていました。目の前の患者さんに何かのかたちで手助けが出来る事は、とてもやりがいのあることでした。しかしながら、中先生の傍で医師としての仕事を続けるなかで、自分は変わらなければならないのではないかと考え始めるようになりました。当時の自分のように、医療者としてのやりがいを持って働くためには組織が必要であり、その組織を守り率いる人間が必要であるということ意識するようになりました。三思会の創立以来、中先生がその役割を担ってきたわけですが、世代交代の時期は必ずやってきます。その役割を引き継ぐ意志を固め、現在に至ります。

中 私は自らの考えや思いを、この社会のなかで具現化したいと思い、人生を歩んでまいりま

した。そのためには、一医師として組織に属するのではなく、自ら組織を立ち上げ、仲間をつくり、組織を大きくするなかで、前進していくしかありませんでした。それをやりぬくことを原動力として、人生の多くの時間を費やしてきました。決して才能があるわけではない自分が一定程度のかたちを残すことが出来たのは、幸運にも、自らの意志を貫く気概を持ち続けることが出来たことと、良い仲間恵まれたためであると感じています。その仲間の一人である野村先生に、経営を引き継いでもらえたことを喜ばしく思います。

野村 法人組織を率いる事は、とても重い責任を担うことではありますが、その分やりがいのあることです。まだまだ学ぶべきことが多くありますが、我々の原点を忘れず前進を続けたいと考えております。

日野 三思会として組織が大きくなるなかで、働いている方々の考えや思いを、同じ方向にむけることを意識しなければならぬ時期にきているのかなと感じていました。そのために、何か力になれることがあるのでは



開設当時の中会長



藤巻先生



入職当時の野村理事長



入職当時の日野本部長

目の前の困っている人に 何ができるのか

ないかという思いで、経営に関わりたいと考えるようになりまし
た。携わるようになりまだ間
もないですが、理事長との二人
三脚でよりよい組織への発展に
尽力したいと考えています。



— 現在の三思会についての お考えをお聞かせください

野村 法人として、責任ある保
健・医療・介護・福祉を推進し、
地域に貢献していくことが三思
会の思いです。目の前で困って
いる人がいたら、少しでも我々
に何か出来ることはないのか。
その思いを軸に組織として発展
することで、できる事やできる
範囲を広げていくことが法人の
使命であり、私が組織を率いて

いく方向性であると考えています。

日野 法人理念として「保健・
医療・介護・福祉」という表現
をし、実際に事業部ごとに役割
分担はされていますが、困って
いる人からしてみれば、この区
分にあまり意味はないのかもしれ
ません。人間という存在は、
不可分な存在です。ある時は医
療が必要となるし、ある時は介
護が必要となる存在です。その
人を全人的な存在として捉え、
法人全体として人や地域を支え
ていくこと。これは中先生が創
立当初に「住民とともに歩む」「健
康を創り守る」という目標を掲
げた時から三思会の精神に内包
されている考えであると受け止
めています。

野村 現在国を挙げて推進して
いる地域包括ケアシステムとい
う考え方も、三思会創立当初か
らの考え方に近いものであると
捉えています。創立時からの行
動指針としての「"待機する"か
ら"行動する"という考え方も、
地域という場に組織として積極
的に参画する必要がある地域包
括ケアシステムの、大事な要素
であると考えています。法人と
して主体性をもって地域包括ケ

アシステムの推進を担ってい
たいと思います。

中 私は創立当時、また、それ
以降はその時代ごとの状況の中
で自分なりの考えを提示しなが
ら組織を牽引してきたつもりです。



理事長・本部長には、是非今の
時代と未来を開拓する切り口で
経営して頂けることを期待して
います。

— 三思会の未来に向かって、 全職員に伝えていきたい メッセージをお願いします

野村 私はジャズが好きで、学
生時代から熱心にとり組んでき
ました。その魅力は、バンド全
体の方向性は定めたとえで、各々
のプレイヤーの演奏に関しては

自由度(自立度)が高いことです。
インプロビゼーションとも表現
されますが、私達の仕事も近い
ものがあるのではないかと考え
ております。患者さんをはじめ
私達がお会いする方は、誰一人
として全く同じ人間はおりませ
ん。型どおりの知識や技術の提
供では対応が出来ないというこ
とです。私達はチームとしての
大きな方向性を定め、各々のメ
ンバーは高いレベルの知識技能
を自立性のもとで提供していく
ことが求められます。その点が、
ジャズという音楽の持っている
精神性・考え方と似ている気が
するのです。大きな方向性を多
くの職員の方と共有し、各々の
職員の方には自立性をもって、
楽しみながら仕事をして頂けた
ら、組織のトップとしてはこれ

以上の喜びはないと考えていま
す。
日野 私は歴史上の人物が好き
で、特に織田信長に興味があり
ます。組織が前進するためには、
多くのことを考え、戦略を練っ
て、それを実行に移していかな
ければなりません。私自身も信
長をはじめ過去にも学びながら、
研鑽していきたいと考えており
ます。また、経営を考えるとき
に念頭にあるのは「人は城、人
は石垣、人は堀、情けは味方、
仇は敵なり」という言葉です。
信長ではなく武田信玄の言葉で
すが、松下幸之助の「事業は人
なり」にも通ずる考え方である
と捉えています。三思会の全職
員を大切に、各々の職員の方
に最大限の力を発揮して頂く
事が出来るよう理事長とともに
経営に携わっていきたくと思

っています。
中 私としては現状では経営の
一線から退き、全職員の方々の
頑張りを見守らせて頂いている
立場ですので、メッセージとい
うことはおこがましいのですが、
自分なりに大切にしてきた考え
方や思いを、メッセージの代わ
りに次の言葉として皆さんにお
伝えしたいと思います。

我が心は石にあらず
連帯を求めて孤立を怖れず
小さな「志」を持ち続け
一日一日をおくる

何のために何を目的に行動する
のか、常に自らに問いかけ、三
思会を前進させて頂きたいと
願っています。



施設紹介

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY

三思会施設

神奈川県の中央地区を中心に、厚木市、愛川町、綾瀬市、平塚市、相模原市、横浜市、海外ではミャンマーに、計 17 施設を展開。保健・医療・介護・福祉のトータルヘルスケアを提供しています。



保健施設

地域の健康を創り守る健康診断、人間ドック、巡回健診を通じて、地域の健康づくりをサポートしています。厚木、新横浜、ミャンマーに 3 施設を展開。三思会内はもちろん地域の医療機関とも連携し、アフターケアにも力を入れています。



東名厚木メディカルサテライトクリニック

住所 神奈川県厚木市船子 224
院長 田中 浩史
設立 1992 年
認定 認定日本病院会指定施設
全日本病院協会指定施設
健康保険組合連合会指定施設
日本総合健診医学会優良認定施設
日本人間ドック学会機能評価認定施設
全国健康保険協会（協会けんぽ）健診実施施設
URL <https://www.tomei.or.jp/tams/>



新横浜メディカルサテライト

住所 神奈川県横浜市港北区新横浜 2-5-11
金子第一ビル 4F
院長 藏本 博行
設立 2015 年
URL <http://syms.tomei.or.jp>



Yangon Japan Medical Centre

住所 No.168/A, Dhama Zedi Road, Shwegonedaing
Ward(West), Bahan Township, Yangon
院長 井上 聡
設立 2019 年
URL <http://www.tomei-mm.com/jpn/>

医療施設

24時間365日の救急医療を掲げ、神奈川県がん診療連携指定病院・地域医療支援病院である東名厚木病院を中心に、外来専門のクリニックや透析センターなど5施設を展開。各施設が連携して地域の医療を支えています。

救急医療
がん治療

外来総合
クリニック

透析治療



東名厚木病院 透析センター

住所 神奈川県厚木市船子 232
センター長 大山聡子
設立 1992年
URL <https://www.tomei.or.jp/toseki/>



東名厚木病院

住所 神奈川県厚木市船子 232
院長 野村直樹
設立 1981年
病床数 282床
ハイケアユニット8床 地域包括ケア病床60床
緩和ケア病床14床
診療科 内科・循環器内科・消化器内科・肝臓内科・呼吸器内科・腎臓内科・糖尿病・代謝内科・人工透析内科・神経内科・外科・消化器外科・乳腺外科・血管外科・呼吸器外科・整形外科・形成外科・美容外科・脳神経外科 救急科・泌尿器科・婦人科・眼科・麻酔科・精神科・皮膚科 リハビリテーション科・放射線科・放射線診断科・放射線治療科・緩和ケア内科
認定 神奈川県がん診療連携指定病院
地域医療支援病院
救急告示病院 など
URL <https://www.tomei.or.jp/hospital/>



とうめい厚木クリニック

住所 神奈川県厚木市船子 237
院長 河野昌史
設立 2001年
診療科 内科・循環器科・呼吸器内科・呼吸器外科・消化器内科・消化器外科・腎臓内科・糖尿病内科・神経内科外科・乳腺外科・血管外科・整形外科・形成外科・美容外科・脳神経外科・泌尿器科・眼科・婦人科・精神科・耳鼻咽喉科・皮膚科・小児科・漢方内科リハビリテーション科・ペインクリニック内科
認定 検体検査管理加算Ⅰ認定
電子化加算認定
在宅療養支援診療所認定
呼吸器リハビリテーションⅠ認定
脳血管疾患等リハビリテーションⅡ認定
運動器リハビリテーションⅠ認定
在宅時医学総合管理料認定
URL <https://www.tomei.or.jp/clinic/>



愛川クリニック

住所 神奈川県愛甲郡愛川町中津 2035-1
院長 村本将俊
設立 2013年
診療科 泌尿器科(透析)・小児科・内科
URL https://www.tomei.or.jp/aikawa_clinic/



とうめい綾瀬腎クリニック

住所 神奈川県綾瀬市深谷中 1-8-20
院長 田村博之
設立 2017年
診療科 腎臓内科・糖尿病内科・内科
特殊外来(禁煙外来・睡眠時無呼吸症候群)
URL https://www.tomei.or.jp/ayase_clinic/



介護・福祉

介護・福祉施設

住み慣れた地域で自分らしい生活が続けるために。ご家族と共に医療・看護・介護・リハビリテーションの専門職がサポートします。介護老人保健施設や訪問看護、サービス付き高齢者住宅など、ご自身のこれからのを考えて様々なケアに対応する9施設を展開しています。



介護老人保健施設 さつきの里あつぎ

住所 神奈川県厚木市船子 322-1
施設長 山下 俊紀
設立 1997年
定員 入所（短期入所含む）100名
（一般棟 55名・認知症専門棟 45名）
通所リハビリテーション 75名（介護予防）
訪問リハビリテーション 10名（介護予防）
類型 超強化型老人保健施設
URL <https://www.tomei.or.jp/fukushi/roken/>



介護老人保健施設 なでしこの里 リハビリひらつか

住所 神奈川県平塚市東八幡 4-19-3
施設長 桐山 誠一
設立 2019年
定員 入所 100名（一般棟 56名、認知症専門棟 44名）
通所 60名（介護 45名、予防 15名）
類型 加算型老人保健施設
URL <https://www.tomei.or.jp/fukushi/nadeshiko/>



複合型施設マザーホーム戸室

多機能型事業所 にじいろ
看護小規模多機能型居宅介護事業 いわしぐも
訪問看護ステーション もみじ
サービス付き高齢者向け住宅 マザーホーム戸室

住所 神奈川県厚木市戸室 1-29-1
施設長 石綿 祐樹
設立 2016年
定員 5名/日（にじいろ）
登録定員 29名（いわしぐも）
2人部屋 4室・1人部屋 16室（マザーホーム戸室）
URL <https://www.tomei.or.jp/fukushi/motherhome/>



厚木市南毛利地域包括支援センター

住所 神奈川県厚木市温水西 2-27-38
カーネーションパーク 1階
センター長 三橋 正保
設立 2006年
URL <https://www.tomei.or.jp/fukushi/houkatu/>



東名厚木病院 居宅介護支援センター

住所 神奈川県厚木市船子 131-1
センター長 三橋 悟
設立 2000年
URL <https://www.tomei.or.jp/fukushi/kyotaku/>

訪問看護ステーション さつき

住所 神奈川県厚木市船子 131-1
施設長 田中 和子
設立 1995年
機能強化型訪問看護ステーション
URL <https://www.tomei.or.jp/fukushi/satuki/>

地域貢献

課外活動

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY

三思会杯

厚木の未来を担う子供たちのスポーツ活動を応援

2011年の三思会創立30周年記念として開催したスポーツ大会をきっかけに、厚木市内の小学生を対象に、2012年より毎年開催されています。ソフトボールから始まった競技も、現在では、少年野球、ミニバスケットボール、少年サッカー、ソフトテニスの5種目へと広がっています。



納涼祭

地域の皆様との交流の場

毎年、夏に行われる東名厚木病院主催のお祭りです。屋台や演芸をはじめ、地域のボランティアの方のご協力でミニSLを走らせるなど、おもてなしを通じた地域の皆様と三思会職員をつなぐ交流の場となっています。最後に行われるビンゴ大会は、子供たちにも好評で、毎年大盛り上がりのイベントとなっています。



さがみ介護ロボット開発支援センター

国が指定する神奈川県地域活性化総合特区である「さがみロボット産業特区」において、生活支援ロボットの開発を普及推進させるために、介護老人保健施設さつきの里あつぎに当センターを併設し、新たな介護ロボットの開発相談、実証試験、利用者へのアドバイス等、行政とも協力して事業を進めています。



特区商品化第1号
パワーアシストハンド

子供たちの活躍の場

厚木市ソフトテニス協会 会長 鷺尾正行

三思会とソフトテニスとの関係は非常に長く、1998年に「神奈川ゆめ国体」を厚木・小田原の2会場で開催した際、緊急時の対応で東名厚木病院に依頼したことがきっかけでした。その後、小学生を対象に三思会杯が開催されました。ソフトテニスは小学校の学校教育にはないため、競技の普及や選手育成など、子供たちの活躍する場となっています。今では「厚木で勝とう」「神奈川で勝とう」「代表になって全国大会にも行こう」と、子供たちも親も一緒に目標をもって頑張っています。



南毛利地域包括支援センター 地域活動

地域事業

南毛利公民館まつり

年1回開催されるイベントで、地域の団体等の活動成果や作品発表のほか、模擬店やバザーも行われます。そこで、健康相談・介護相談のブースやパンフレット等を設置し、困りごとへの相談対応の他、地域包括支援センターの普及啓発を行っています。

南毛利シニアフェスティバル

地域福祉推進委員会主催で、年1回開催されるシニアの方々の文化・スポーツ活動の成果を発表するイベントです。健康相談（血圧測定）・体力測定・栄養相談のブースをリハビリテーション科、栄養科など法人職員の協力を得て設置しており、毎年好評をいただいています。

地域の通いの場などへ参加

自治会、老人会、マンションなどの「地域の通いの場」に参加しています。地域包括支援センター職員が講師となり、介護保険、認知症、介護予防などの講話や体操指導などを行うほか、法人内外に講師を依頼し、地域のニーズに応じた行事開催に協力しています。



自主事業

南毛利いきいき健康教室

南毛利公民館にて年5回、介護予防・介護保険制度・権利擁護など、地域の方に役立つ講座を企画、開催しています。

南毛利ケアマネジャー連絡会

南毛利公民館やオンライン等で、年6回、地域のケアマネジャーの情報交換やスキルアップの場として、連絡会を開催しています。

認知症サポーター養成講座

認知症の基礎知識、認知症の人への具体的な接し方、認知症サポーターの役割などを習得する講座。南毛利地域包括支援センター主催で開催するほか、小学校、企業、地域などでも開催しています。受講すると、認知症サポーターになった証であるオレンジリングが渡されます。

* 認知症サポーターとは

認知症について正しく理解し、認知症の人や家族を温かく見守り、自分のできる範囲で活動するサポーター。

友人や家族に学んだ知識を伝える、認知症の人や家族の気持ちを理解するように努める、というのも活動のひとつです。



部活・サークル活動

三思会では福利厚生として、東厚会があります。
日帰り旅行・部活動などを通して、職員同士の交流の場を積極的に作っています。部活・サークルの活動が三思会のみならず、地域の方との交流へも広がっています。

野球部



■部員数 20名

■活動歴

1996年4月より活動

■活動内容

毎年、病院協会野球大会出場に向けて、球場を借りて練習をしています。

■実績

- ・神奈川県病院協会野球大会参加
- ・1996年度 神奈川県病院協会野球大会
3部リーグ 優勝
- ・1997年度 神奈川県病院協会野球大会
2部リーグ 準優勝
- ・1998年度 神奈川県病院協会野球大会
1部リーグ 準優勝
- ・2002年度 神奈川県病院協会野球大会
1部リーグ 優勝
- ・2003年度 神奈川県病院協会野球大会
1部リーグ 優勝
- ・2006年度 神奈川県病院協会野球大会
2部リーグ 3位
- ・2008年度 神奈川県病院協会野球大会
2部リーグ 準優勝



陸上部



■部員数 20名

■活動歴

1999年中村美千子・有馬義裕により発足


実質初年度の2000年度には7大会へ出場

過去には、夏・冬に強化合宿を実施

■活動内容

近年は年1回近隣で開催される大会に複数チームを組んで参加しています。

■実績

- 2012.9
第15回24時間ゆめリレー in 湘南平塚
6時間の部 第9位
 - 2014.2
第1回リレーマラソン地球 優勝
- 
- 2016.2
第2回横浜グリーンマラソン 個人の部 第5位
 - 2017.7
第1回ウルトラリレーマラソン相模原 準優勝
 - 2018.2
第1回リレーマラソン in 開成水辺公園
2時間の部 5位入賞
 - 2019.2
第2回リレーマラソン in 開成水辺公園
2時間の部 準優勝
 - 2020.2
第3回リレーマラソン in 開成水辺公園
4時間の部 3位入賞

写真部



■部員数 12名

■活動歴

2010年に同好会として発足。

翌年度よりサークル承認され活動しています。

■活動内容

- ・ホームページ、広報誌のための写真撮影
- ・施設内院内写真展示
- ・法人イベントの写真係として参加

■実績

三思会忘年会にて写真コンテストを開催



よろず音楽隊



■部員数 18名

■活動歴

2006年12月より活動開始。

2006年当時、老健さつきの里あつぎ 婦長の還暦祝いに、有志で「涙そうそう」の生演奏♪をプレゼント。このサプライズイベントが大いに盛り上がり、サークル活動へと発展しました。

■活動内容

- ・週1回の朝練
- ・出前演奏の依頼を受け、本番の1か月程度前から必死に練習
- ・年間10回程度の出前演奏があり、月1回の練習と月1回の本番となる

■実績

- ・納涼祭
- ・東名厚木病院看護の日
- ・三思会第2事業部 在宅懇談会
- ・さがみ緑風園にてベッドサイド演奏
- ・船子自治会納涼会
- ・厚木市主催 クリスマス会
- ・高森台ミニサロン
- ・愛甲公民館 他

厚木市内の複数の自治会、ミニデイなどに出前演奏



アクアリウムサークル



■部員数 18名

■活動歴

2014年4月より野村理事長を中心として発足。

■活動内容

患者さんや職員にアクアリウムによる癒しを提供しています。また、生物採集や飼育を通して職員同士の交流を深めています。

■実績

2018.5

コーラルフリークス Vol.26

クラゲはストレス緩和に効果があるか？【調査開始編】

2020.2

日本総合健診医学会 第48回学術大会

口演発表 ミズクラゲ観賞によるストレス緩和の調査
(新江ノ島水族館共同調査)

2020.6

コーラルフリークス Vol.31

クラゲはストレス緩和に効果があるか？【結果報告編】



2020.7

生物の科学 遺伝 Vol.74

No.4 日本水族館におけるクラゲ飼育展示
(調査結果紹介)

2021.3

東京経済大学 全学共通教育センター 大久保奈弥准教授 2017年度 公益財団法人 旭硝子財団 環境研究 近藤次郎 Grant 和賀江島 355 (生物採集、生物同定、生物写真提供)

2021.6

コーラルフリークス Vol.34

京セラ水族館用 LED ライト読者モニター REPORT

フラダンスサークルメケアロハ



■部員数 10名

■活動歴

2015年4月発足。

■活動内容

普段は動画を参考に自主練習。出演前は集合して練習しています。メケアロハは、「愛をこめて」という意味です。



■実績

三思会納涼祭・忘年会に出演。

その他、近隣の高齢者施設へ出向き、披露しています。高齢者の知っている曲や日本語の曲と一緒に踊ったり歌ったりしています。

COVID-19

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY

3つの“無い”から始まった

The period of Confusion

情報が無い・手段が無い・物資が無いー。

未知との遭遇

Close Encounters of the COVID kind

2019年12月中国・武漢市で発生した原因不明のウイルス性肺炎は、瞬く間に全世界へ広がり私たちのそれまでの生活を一変させた。

また、それは当然のこととして、我々医療従事者の行動を変容させることとなった。

以下は、当時、東名厚木病院の病院長として、未知のウイルスに対し手探りの中で闘ったひとつの奮闘記である。

新型コロナウイルスとの闘いは、まさに未知との遭遇であった。断片的に得られる情報は、日々更新され、その真贋を確認する間もなく、次々と情報が氾濫した。情報量だけは多かったものの、当時、信頼に足る情報は極めて少なかった。その様な状況の中、スタッフは混乱に陥り、病院長として、何を院内に発信していくべきか、大いに悩んだ。

当院での日常診療において、発熱患者は少なくない。そして発熱の原因は多岐にわたる。新型コロナウイルス感染の拡大により、発熱患者が受診した場合は、その感染者でないことを確認出来なければ、十分な診療が出来なくなった。診断するための検査方法は、PCR検査が主であったが、当初は行政検査であり、一定の基準を満たさなければ、検査自体が出来なかった。また、診断がついたとしても、治療手段が確立していなかった。確立していなかったというよりは、ほぼ無かった。いくつかの薬剤が有効であるらしいという情報は当時からあったが、有効性は不明確であった。検査・治療の手段が身近に無い中で闘いだった。

徐々に感染経路等の正確な情報が得られる様になり、感染対策の方法論自体は定まってきた。しなしながら、そのための物資が枯渇していた。感染防御に必要なのは、もちろん、我々医療従事者のみではない。一般市民も、同様に感染防御策を必要としていた。それも全世界で。それまでの日常では、十分に備蓄があり、不足を感じる事がほとんどなかった医療物資が、全く院内に入ってこなくなった。対策方法がわかっていながら、物資が足りない事で対応が充分に出来ない。もどかしい時間が続いた。

もちろん困っていたのは我々だけではない。一般市民も、地域医療機関も、行政も、未知との遭遇で、皆、混乱していた。正確な情報が少ないうちは、とりあえず身をかがめて、自分を守るしかない。しなしながら、身の回りの安全が、仮に、一時得られたとしても、ウイルスが撲滅されているわけではない。個別での闘いのみではなく、広い範囲での闘いへとシフトする必要性が生まれていた。

地域との協力、役割分担へ The period of Regional cooperation, Role sharing

地域として、新型コロナウイルスにどのように相對していくのか。地域医師会・近隣医療機関・行政 等々が集い、対策を講じるべく知恵を出しあった。その中で、医療機関においては、各々の診療提供体制や地域特性を踏まえての役割分担がなされた。当院としては、主に新型コロナウイルス感染者を積極的に受け入れて、その治療を行う役割ではなく、当時の状況下においても、救急診療をはじめとした、地域としての急性期医療提供の継続を担う役割となった。当時、新型コロナウイルス感染者の受け入れ病院においては、平時、提供出来ていた急性期医療が、感染症対策にリソースを割くため、継続困難となる可能性が予見されていた。その不足分の急性期医療を、当院で提供するという方針であった。

なんとかしなければならないー。

役割分担が明確化されたことで、近隣医療機関との協力関係も、より強固なものとなった。個別の不足を、お互いに補い合う関係性も生まれ、当院としても、近隣医療機関（新型コロナウイルス感染者受け入れ病院）への医療スタッフの派遣等を行い、地域全体としての医療提供体制維持に、微力ながらも貢献できたものと自負している。

地域における当院の立ち位置が明確になった以上、もし当院で院内クラスターが発生してしまえば、この地域の急性期医療は崩壊する。そのような思いの中、三思会としての感染対策チームを立ち上げ、法人内での情報の共有・発信を開始した。

当初こそ混乱も多かったが、徐々に共通認識が組織に広がり、感染対策の骨子となる、個人用防護具の適正使用、救急外来や病棟におけるゾーニングの考え方、法人で採用した遺伝子検査や抗原検査の取り扱い方法、等々についての理解も浸透していった。枯渇していた医療物資も供給が回復基調となり、少しずつではあるが、感染防御の体制が整いつつあった。それに伴い、法人としての外来診療における発熱患者への対応の capacity も拡大していった。

東名厚木病院においては、患者が入院する際の各種検査体制構築も含め、感染対策を徹底した。手術患者においては、原則、全例遺伝子検査を行う方針とした。新型コロナウイルス感染者の緊急入院も想定し、行政の協力も得て、病棟に陰圧室を設置した。また、近隣医療機関からの情報の中で、市中で感染した医療スタッフから院内クラスターが発生したケースが散見されたため、全スタッフの検温・健康記録表の作成等も開始した。

徹底した感染防御への取り組み The period of Thorough infection prevention

絶対に起こさないー。
クラスターを、絶対に起こさないー。

救急患者が感染者である可能性は一定程度ある。なかには、そのまま入院治療が必要となる患者が存在している可能性もある。入院時に遺伝子検査を行っても、感染を同定出来ないリスクもある。当院の使命は、多くの救急患者を受け入れ、なおかつ適切な感染対策を施し、院内クラスターを発生させず、地域への急性期医療の提供を継続すること。決して簡単なことではないが、その使命感を持って、今後も医療活動を続けていく。

感謝

My gratitude

この一年以上におよぶ闘いの中で感じたことは、やはり感染症の恐ろしさである。長年、感染症診療には携わってきたが、このような未知との遭遇を前に、時に無力感を抱くこともあった。しかしながら、わかっていること・できることを、着実に実行していけば、一定程度の成果を挙げることが出来るのだという実感も得る事が出来た。この先の未来に、また新たな未知との遭遇があるかもしれない。このつたない奮闘記から、後輩達が見るものがあるのであれば幸甚である。

個人的には、院長職としての最後の年に、この「未知との遭遇」をした。通常であれば、集大成の年として、他にやりたいこともあった。感染症が広がった当初は、組織内での統制を取ることが難しく、つらい思いもした。しかしながら、混乱した状態だったからこそ、色々と考え、感じたことも多かった様に思う。こんな集大成の年も、これはこれで良かったのかもしれない。


この困難な状況の中、なんとか走り切ることが出来たのは、周囲の大きな支えがあったからだと思う。患者・利用者・地域住民の方々、地域医師会・近隣医療機関・行政の方々、そして、時に無理難題を言うこともあった自分を信じ、これまでついてきてくれた全てのスタッフに感謝いたします。本当にありがとうございました。

東名厚木病院名誉院長 山下 巖



新型コロナウイルス感染症に関する出来事


2020年 国内・国外

- 1月 国内初の感染確認
- 2月 新型コロナウイルス感染症が指定感染症となる
大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号にて
集団感染確認（21日にほぼ終了）
WHOが新型コロナウイルスを「COVID-19」と名付ける
国内初の死者（神奈川県在住 80代女性）
- 3月 公立学校が臨時休校となる
改正新型インフルエンザ対策特別措置法が成立
東京オリンピック・パラリンピック1年延期
県が「神奈川モデル」を発表・重点医療機関の指定
- 4月 7都府県に緊急事態宣言を発出

- 5月 専門家会議より「新しい生活様式」提案
5都道府県の緊急事態宣言解除
- 6月 飲食店などの営業時間短縮要請解除
接触確認アプリ利用開始
- 7月 感染再拡大を受け、県独自の警戒アラート発動
- 8月 県内感染者が初めて3桁に
- 11月 「発熱等診療予約センター」稼働開始
医療アラート発動
感染状況ステージ3（感染急増）・警戒宣言発出

2021年

- 1月 首都圏4都府県に緊急事態宣言再発出
県内感染者過去最多995人
静岡で変異ウイルス感染確認
世界の感染者が1億人を超える
- 2月 国内死者6000人を超える
イギリスでワクチン接種の臨床試験実施へ
新型コロナワクチン 国内初の正式承認
新型コロナ ワクチン先行接種始まる
医療従事者 約4万人対象
- 3月 緊急事態宣言解除
- 4月 高齢者へのコロナワクチン接種始まる
まん延防止等重点措置適用

2020年 三思会

- 2月 面会禁止・正面玄関にて検温開始
職員へ出勤前検温を徹底

- 3月 新型コロナウイルス対策会議 開始
東名厚木病院 お見舞いメールサービス 開始
- 4月 コンテナハウス設置・発熱外来 開始（とうめい厚木クリニック）
小児科電話再診 開始（愛川クリニック）
健診センター 休業
テレビ電話面会開始（さつきの里あつぎ・なでしこの里リハビリひろつか）
職員向け感染対策リーフレット作成
- 5月 健診センター 一部営業再開
東名厚木病院 病棟（4号館4階）ゾーニング 開始
- 6月 小児科玄関分離 完了（愛川クリニック）
- 7月 東名厚木病院 院内でのLAMP法 開始
コンテナハウス撤去（とうめい厚木クリニック）
玄関にサーマルカメラ 導入（とうめい厚木クリニック）
職員の検温・健康記録 開始
- 9月 海老名総合病院へ看護師4名派遣
- 10月 発熱外来専用ブース 設置（とうめい厚木クリニック）
- 11月 新型コロナウイルス感染症対策医療提供体制
「神奈川モデル」重点協力医療機関となる
- 12月 東名厚木病院 陰圧室改修工事 開始
感染者対策用減圧病床4床設置

2021年

- 1月 職員へフェイスシールド着用を徹底


- 4月 ワクチン接種 開始


未来へ

SANSHIKAI 40th ANNIVERSARY

三思会のトータルヘルスケア

三思会の提供する保健・医療・介護・福祉は地域の皆様にとって、日常生活の一部として存在するものと考えています。地域の方がいつでも安心して暮らせるよう、困ったときにはいつでも頼ってもらえるような存在として、三思会は、保健・医療・介護・福祉のトータルヘルスケアを進め、地域の皆様に安心を提供できるよう引き続き、取り組んでまいります。



三思会



健診・人間ドック



救急医療・がん治療



外来総合クリニック



透析治療



介護・福祉



地域の皆様



救急医療
がん治療

第1事業部
東名厚木病院

臨床研修指定病院の役割

医学部を卒業した医師は、様々な診療科で医師としての基本的な知識や技術を獲得し、患者さんたちにも対応することにより学び成長します。臨床研修指定病院とはそのような医師育成がしっかりとできると判断された病院に指定されるものです。当院は2003年に指定され、毎年数名の研修医の方たちを新しくお預かりしています。



地域医療支援病院の役割

地域医療支援病院とは地域の医療機関を支援する役割を担った病院です。平成30年のデータでは全国で607、神奈川県で35の病院が指定を受けています。救急医療体制がしっかり整備され、かかりつけ医の先生との施設の共同利用や、一定以上の患者さんの紹介・逆紹介があり、地域の医療連携がしっかりできている200床以上の病院が認定されます。当院は2011年に県央医療圏で初めてこの地域医療支援病院の指定を受けました。

神奈川県がん診療連携指定病院の役割

神奈川県がん診療連携指定病院とは地域における「質の高いがん医療」を行っている病院で、国が指定する地域がん診療連携拠点病院と同レベルの病院に神奈川県知事が独自に指定するものです。

当院は2020年に県央医療圏では初めての指定を受けました。



時代を捉え 地域に貢献できる病院へ



まずは創立40周年を迎えるにあたり、地域の皆様、行政の皆様、医療介護福祉関連の皆様ほか本当にたくさんの皆様に支えていただきましたこと、心より御礼申し上げます。

当院は創立以来、医療の原点であります救急医療を最も重要な責務の一つとし活動してまいりました。現在、救急車による搬送は年間5000台を超えており、厚木市では最も多くの件数を対応させていただいています。また2020年には神奈川県がん診療連携指定病院の資格をいただきました。超高齢社会を迎える中、がん患者数はいまだ右肩上がりに増加しています。ご高齢者のがんに対する対応は環境とともに変化しているものと認識しています。2017年に4号館を新設、放射線治療を開始しました。また内視鏡センター、がん化学療法センター設置、そして緩和病棟を開き、さまざまながん治療、

がん対策に対応できるよう準備を行い、昨年の神奈川県がん診療連携指定病院の認定を受けた次第です。また様々な職種においてがんに関する専門性を持ったスタッフが皆様からのがんに対する相談にも対応できる体制をとっています。ご利用いただければと思います。

一方、超高齢社会における社会保障の一つとして地域包括ケアシステムの構築が10年来検討されてきました。地域包括ケアという言葉が抽象的でなかなかまだご理解いただけない環境にあります。簡単に表現すると近く迎える超高齢社会では医療を支える財源が確保できず今のシステムでは皆さんの命や健康を支えきれない状況が懸念されます。そこを代替するのが地域包括ケアシステムであると理解しています。共助、公助のみに頼るのではなく、自助、互助を含めた全体像としての地域包括ケアシステムが描かれています。

また我々三思会が創立以来掲げてきた地域に対する責任ある保健、医療、介護、福祉の提供が盛り込まれています。厚木市は“地域包括ケア社会”の構築と表現していますが、その中で病院の役割を熟慮し、超高齢社会に対応していくこともこれからの病院の大きな役割と考えます。

様々なところで環境が大きく変わりつつありますが、改めて地域の皆様の命と健康を守るといふ根源を見間違えることなくこれからも責任ある活動を心してまいりたいと思います。



東名厚木病院
院長
野村 直樹



介護・福祉

第2事業部

- 介護老人保健施設 さつきの里あつぎ
- 介護老人保健施設 なでしこの里 リハビリひらつか
- 複合型施設マザーホーム戸室
- 多機能型事業所 にじいろ
- 看護小規模多機能型居宅介護事業 いわしくも
- 訪問看護ステーション もみじ
- サービス付き高齢者向け住宅 マザーホーム戸室
- 訪問看護ステーション さつき
- 東名厚木病院 居宅介護支援センター
- 厚木市南毛利地域包括支援センター

地域包括ケアシステムの構築を目指して

高齢者が住み慣れた地域で自分らしい生活を全うできる社会を目指して、2025年を目途に整備が進められています。地域の介護事業者と共同して、ケアマネジャーを中核としたシステムの構築を目指しています。



リハビリを通じて生活の質を向上する

快適な在宅生活を送るうえで、リハビリは欠かせないものです。生活リハビリに特化して訪問・通所・入所リハビリを行っています。また住宅改修の提案や啓蒙活動も行っています。



人生の終末を穏やかに迎えるために

今後、多死社会が始まります。訪問看護による在宅での見取りは行われていますが、在宅復帰を支援する介護老人保健施設であっても、入退所を繰り返せば、ついには終末期を迎えることもあります。この時には入所のまま御家族を交えての看取りケアが必要となります。



人生100年時代、これからの介護



団塊の世代が70歳台となった現在、日本は超高齢社会を迎えました。三思会は創設時から高齢者の在宅医療に力を入れ、1995年に訪問看護ステーションを開設しました。2年後、居宅介護支援センターを設立し、高齢者障がい者の在宅療養を支援しています。同年介護老人保健施設さつきの里あつぎを開所し、在宅復帰超強化型施設として機能しています。2005年に介護保険法の改定により地域包括ケアシステムが提唱され、翌年南毛利地域包括支援センターを設立しました。2016年には看護小規模多機能居宅介護事業、訪問看護ステーション、多機能型事業所、サービス付き高齢者住宅を一体とした複合型施設マザーホーム戸室、2019年に平塚市に介護老人保健施設なでしこの里リハビリひらつかを設立しました。これらの施設群を第2事業

部は有しております。今年から介護報酬改定で科学的介護情報システム（LIFE）が始まりました。これは今までの漫然とした介護事業から成果の見える介護事業への変革を目指したものと思われます。また、現在の問題としては介護人材の不足があります。外国に依存することもあるでしょうが、労働人口の高齢化があり、今後の介護士は高齢化せざるを得ないと思われます。そのために介護技術の進歩、業務改善、省力化は必要と考えます。平均寿命と健康寿命の間の時期が介護を必要とする時間です。この期間をできるだけ在宅で過ごすには、リハビリを通して活動量を増やし、生活の質を上げ、介護負担を軽くする必要があります。高齢者の介護において、避けて通れないのが終末期介護です。人生の終わりに際して、御家族

との別れを穏やかに過ごしたいという思いは、医療ではかなえにくいものと思います。在宅療養できない人も多いことから、在宅では訪問看護師、施設入所では老健施設が、医療機関で回復不能と診断された方を看取っています。以上によりこれまでの介護業務を生かして今後の介護を構築していこうと考えます。



介護老人保健施設
なでしこの里リハビリひらつか
施設長
桐山 誠一



健診
人間ドック

第3事業部

東名厚木メディカルサテライトクリニック
新横浜メディカルサテライト
Yangon Japan Medical Centre

病院、クリニックとの
連携と情報共有

健診の役割は疾患の早期発見と予防による健康寿命の延伸ですが、発見された疾患の治療にあたっては、ネットワークによる画像を含めた情報の一元化を通じ、病院、クリニックへのスムーズな橋渡しと共有化がなされています。

多種多様な健診に対応し、
巡回健診と産業医活動を実施

ドックをはじめ、安衛法健診、生活習慣病予防健診、特定健診、がん検診、さらに特定化学物質や有機溶剤などを扱う特殊健診といった多種多様な健診を提供しています。また年間約220日は近隣の工場、企業、大学、役所へ専用バスを用い巡回健診に出向き、一部の企業には産業医活動も行っています。

昼食前に全てが完結するスピーディーな人間ドックのスタイル

ドックは受診当日午前中に、脳MRIを含むほぼ全ての検査結果を集約し専門性の高い医師による結果説明を行っています。医師面談終了後には、階層化により適応のある受診者に対し専任保健師による保健指導が行われ、その後にランチルームで昼食を提供しています。



健診センターの過去・現在・未来

第3事業部は健診を担当しています。法人における健診の開始は今から35年前の昭和61年に遡り、この時代健診に注力する病院は少なく、予防医療の重要性が叫ばれている昨今をみるにつけ、当時の先達は慧眼の持ち主であったと実感します。現在では院内と巡回を含む全検査者数は年間6万5千人に達し、これも35年という歴史の積み重ね故だと思います。

最近の大きなイベントに、2つのサテライトの設立が挙げられますが、1つは新横浜における開院です。無からのスタートでしたが、3年目には黒字転換を果たし都会の一角で周知されるようになりました。2つ目は国際貢献を目的にミャンマー国に設立した健診兼クリニックです。現地のミャンマー人、在留邦人にとって唯一無二の存在であり、軍事クーデターにより休院を余儀な

くされていますが、状況の好転を待ちたいと思います。

2020年は新型コロナウイルス感染症により混乱を極めた年でした。午後ドックを新設し午前の過密状態の緩和に努めてきましたが、ウィズコロナ時代の新しい健診の在り方が模索されています。健診、とりわけドックは結果説明を含む医師面談と保健指導が肝要であり、ここから個人の行動変容につながると言えます。これは現代のオンライン技術で可能な領域と思われ、今後検討すべきと考えています。

また近い将来、汎用性を有するMRIの進歩や血液中の循環腫瘍DNAの分析により癌診断を行うリキッドバイオプシーの技術革新などから、より個人のリスクに特化したオーダーメイド型の健診が普及してくる可能性があると思われ。併設型健診施設のメリットを生かし法人

内で連携をとり準備を進めたいと考えています。ただし、多くの方が関与する健診は、これからも安衛法健診、特定健診などの簡易なものや巡回健診による企業健診などであり、個人のヘルスリテラシーを高めることが予防医療の根幹であることを肝に銘じ、地域や企業の特徴に応じた多種多様な健診に変わらず注力していきたいと思っています。



東名厚木メディカルサテライトクリニック
第3事業部長
中川 望



透析治療

第4事業部

愛川クリニック

とうめい綾瀬腎クリニック

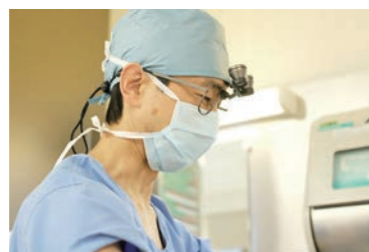
最先端の透析治療の提供

血液透析は透析器（人工腎臓）と透析液を用いて直接血液を浄化する治療です。最先端の透析器により血液への影響を抑えながら様々な毒素を除去しています。また最先端の技術で最適な透析液を生成・使用しています。これらにより質の高い透析治療を提供しています。



透析患者さんの合併症に対する医療の提供

血液透析の原因となった高血圧症・糖尿病などは勿論、腎機能廃絶による貧血・骨代謝異常の治療を行っています。そして長期血液透析による血管の石灰化・心疾患・整形疾患の治療、透析を行う命綱であるブラッドアクセスの管理は専門医の協力を得て行っています。



血液透析を受けながらQOLの向上を

血液透析（週3日×1回4時間）は時間的拘束だけでなく、食事の制約もあり窮屈になりがちですが、制約の中でも美味しいものを食べ、生きがいを見出してもらえよう、一緒に考え、より良い生活を送れるようサポートしています。



「透析を受けながら満足できる人生」の伴走者たれ

第4事業部は外来血液透析を提供する事業部として設置されました。外来血液透析は通院等を考慮して地域密着な医療であり、船子に東名厚木病院透析センター、愛川町に愛川クリニック、綾瀬市にとうめい綾瀬腎クリニックを開設しています。

腎臓機能が廃絶した時、腎臓の代わりにする治療方法（腎代替療法）には、「腎移植」「血液透析」「腹膜透析」があり、現在第4事業部で行っているのは「血液透析」だけですが（腹膜透析はとうめい厚木クリニックで提供）、将来的には第4事業部を中心にすべての腎代替療法の提供を行っていきたいと考えています。日本における血液透析療法は、透析器（人工腎臓）や透析液の開発・改良、腎性貧血をはじめとした腎不全の病態に対する治療、合併症対策等により、その質（生命予後）は世界一となっ

ており、今後もさらに改良が進んで行くはずで

一方、一般的に、血液透析を受けている患者さんの生活といえば、透析を受けた日は家に帰っても横になっていることが多く、元気に動けるのは透析がない日だけだとか、食事制限が厳しく、好きなもの・美味しいものをあまり食べないようにしているなど、必ずしもその生活の質は高いものではないように感じます。

日本の透析導入の平均年齢が70歳、透析患者さんの平均年齢も70歳です。透析患者さんは約10年程度、透析を受けながら生活することになります。その生活をより良く、満足できる人生にできるよう、患者さん自身が自分の健康状態を理解し、対応できるようにサポート（寝たきりにならないように腎臓運動療法の開始など）、医療設備・医療施設の更新、充実、そして、

患者さん自身の人生観・価値観をお聞きし、それに沿った生活のサポート、生活の場（入所施設）の提供についても準備を開始しています。

その結果として、今まで以上に透析療法の満足度の上昇、透析のある生活の質の向上ができると考えています。



とうめい綾瀬腎クリニック
院長
田村 博之



外来総合
クリニック

第5事業部
とうめい厚木クリニック

気軽に受診でき、しかも迅速、 的確な診療の提供

外来部門が優れた役割を保有しているか否かは、すぐに受診でき、迅速に検査や診断を行う初期対応能力があるかどうかということです。クリニックでは、内科・外科出身者を基盤とした総合診療科を充実させ、まず総合的に診察し、必要な専門診療科へ誘導する体制を強化しています。



かかりつけ医としての機能を充実

大規模医療機関では、限られた時間内で専門診療中心の医療が行われ、いつでもどんなことでも相談のしてくれるかかりつけ医というイメージがないと思います。専門科のみ受診中の患者さんでも体調の悪い時には、クリニック内の総合診療科ですぐ対応いたします。



予防医学の観点を重視した クリニックのかたち

御病気の時にすぐ受診することも重要ですが、日頃から生活習慣病やがん検診を行い、病気を未病の段階で予防していくことも必要です。お仕事を忙しい患者さんには、別個に時間を割き検診に行かずに済むよう、クリニック内でがん検診を中心とした予防医療に力を入れています。



多様化する時代に合わせた クリニックをめざして

当院は東名厚木病院の外来診療部門のクリニックとして、平成14年に独立施設として開設し、平成19年から現在の敷地で診療を開始しております。今年で20年目を迎えます。

地域の皆様のかかりつけ医としての機能を十分に発揮できるように、体調が優れない時にはいつでも受診でき、迅速な診療が提供できるような地域密着型クリニックでありたいと願い、実践してきました。がん診療を始め、できるだけ多くの疾患を地域完結で行えるように幅広い診療科と質の高い医療レベルを維持できる体制も構築してきました。

この20年間、幅広い年代層の地域の皆様の要望に応えながら、診療科の増設、受診しやすい曜日や時間設定、待ち時間の短縮化、防災対策などに取り組んできました。まだまだ不十分な点

もありますので、さらに利便性は改善していきたいと存じます。

さて、今後を見据えた新しいクリニック像を考えてみたいと思います。2人に1人ががんに罹患する時代、超高齢化の社会になりますので、予防医学を含めたトータルケアを提供できるクリニックが要求されると思います。専門診療科と併存する形で、総合診療科を充実させて、持病で通院中の患者さんに生活習慣病やがん検診を年間計画として提示するなど重要な役目となってきます。元気と思って生活され長年受診されていない患者様の中には、病勢が進んだ段階で受診される方が散見されるのも事実です。一病息災こそが、今後いつまでも元気で健康にいられる秘訣であると考えています。また、夜間・休日などには遠隔で、在宅診療の別形態として対応するシステムの構築も進

めたく思います。

法人の入り口として、クリニックの果たす役割は益々大きくなると思っております。そのためには、地域の皆様に安心安全と信頼される診療を提供することが第一です。患者さんの気持ちに寄り添い、患者さんのニーズにきめ細かく対応していく姿勢を一層強化し、地域に貢献していきたいと考えています。



とうめい厚木クリニック
院長
河野 昌史

10年後の自分へ

三思会職員の若手を中心に、
将来なりたい姿を考えてもらいました。





未来への抱負

三思会創立40周年職員向けイベントを企画・運営するメンバーに、これからの抱負を語っていただきました。



理事長室 室長
東名厚木病院 整形外科
中 正剛

変と不変

アメリカには founding fathers という概念が存在する。近代国家は憲法により国家を制御するという構造を持つが、その憲法以前に必ず土台となる「憲法意思」が存在する。「憲法意思」は「憲法の精神」であり、アメリカの始祖としての founding fathers の存在は、その参照点として位置づけられている。現代においても超大国として君臨しているアメリカの精神に、founding fathers の精神が影響していることは間違いのないことだろう。

三思会は今年で40周年を迎えた。1981年の6月1日60床の東名厚木病院の創立から始まり、現時点で17施設を有する組織へと成長した。当法人の founding fathers の「創立意思」が、幸運にも多くの方々の賛同を得ることが出来た故と考える。

時代は変わり、人々の価値観は変わる。組織として社会から求められることも、当然ながら、変わる。先が見えづらい時代と言われる。本当にそうであろうか。founding fathers と、その意思に賛同し三思会のために御尽力頂いた方達がともに夢想した未来と、今私達が夢想する未来は大きく異なるものだろうか。そうではないような気もする。

変と不変。テクノロジーと意思。社会構造と common sense。ダーウィン進化論の誤解。現代を生きる私達の目の前には、多くの学ぶべきことと、多くの参照点がある。

“満足してもらおう”をあきらめない



東名厚木病院
総務課 課長
石綿 祐樹

わたしが仕事で得た教訓は2つあります。まず一つ目が、「断らない」ことです。これは理事長ならびに会長の診療に対する姿勢から学びました。もうひとつは「あきらめない」ことです。これは地域医療支援病院承認(2011)申請時、事務担当を担い、粘り強く行政とやりとりした経験で培いました。

患者さん・利用者さんが私たちに期待すること、それは適正な保健・医療・介護・福祉サービスですが、肝心なことはそのサービスに“満足”したかです。満足したかどうかは、サービスを受ける側の判断で決まります。サービス提供側の「納得」ではなく、今目の前にいるひとがいかに「満足」したか、にこだわることです。

「満足」してもらおうには、その人がどのような経路で、また生き方を経て、この場に来ているのか、その文脈を知ろうと努力したうえで、考えに考えて、ことばを発し、行動することです。

満足してもらおうという気持ちが相手に伝われば、満足であれば、感謝の言葉をいただけますし、満足していなければさらなる要求(期待)をいただくことができます。

更なる期待に応えるため、どうすればよいかを、あきらめずに、考えに考えていきます。

地域包括ケア社会の実現へ向けて



法人本部管理部
総務課

武尾 竜平

2025年には国民の約4人に1人が75歳以上の高齢者になると言われる中、厚木市は独自の取り組みとして「地域包括ケア社会」の実現を目指しています。国が進める「地域包括ケアシステム」と大きく違うのは、高齢者だけでなく、子どもから高齢者まで全世代が安心して地域で暮らし続けるための仕組みづくりを行っている点です。

三思会は保健・医療・介護・福祉という4つの柱の中で、17の事業展開をしています。その中には、医療をはじめとして、要介護状態の高齢者を手助けするものから、重度障害を持った児童のケアに関するものまで様々です。それはまさに地域包括ケア社会のツールを兼ね揃えた法人であると言えます。

三思会の未来を見据えた際に実現しなければならないことがあります。それは地域包括ケア社会を三思会という枠の中でまずは実現することです。これまでの40年間でそうであったように、地域と共に三思会も変化していく必要があります。

17の事業所が連携し、三思会を利用する方々を支えていくことは、地域社会への最大の貢献になると考えます。一つ一つの事業所が線で結ばれるよう、自分自身が行動し、そして変化させていきたいです。

理想のチーム



東名厚木メディカルサテライト
事務部

佐伯 健太郎

私はサッカーを観るのが好きです。一番好きなチームはACミランというイタリアのチームなのですが、特に2006-2007シーズンのACミランが好きでした。理由は数多くありますが、特徴やクセのある選手がお互いを補完し合い、チームとして完成されていたからです。

ガットゥーゾが走り回りボールを奪う、ピルロが中央で長短のパスを駆使してゲームを作る、フォワードには得点力が高いインザーギがいて、それらのメンバーをまとめるのは経験豊富なディフェンダーのマルディーニでした。(サッカー観ない人すみません！)

このチームは、欧州チャンピオンを決めるチャンピオンズリーグで優勝を果たしました。

私が考える理想のチームは、まさに2006-2007シーズンのACミランです。私は三思会も、保健・医療・介護・福祉という事業部ごとに特色や専門領域を持つチームだと考えています。10年後・20年後には、今以上にお互いがお互いを補完し連携し合う魅力ある法人にしていきたいです。

そのために各事業部の仲間と仕事内容をしっかりと理解し、自分のいる事業部の役割や強みを更に伸ばしていきたいと考えています。

恩返し



愛川クリニック
臨床工学科

四元 夏織

「私は、入職してから今まで何をしてきたのだろう。」この原稿の依頼を頂いて、そんなことを考えた。色々と思い出したことはあったけれど、これと言って思い当たらない。ただただ、やるべきことをやってきただけのように思う。では何故、今まで続けてこられたのだろう。

真っ先に浮かんだのは、患者さんからかけられた「ありがとう」の言葉だった。折れそうだった私の心が、何度も救われた言葉だ。私は、入職してからずっと人工透析と関わってきた。ほとんどの維持透析の患者さんとは、1週間に3回会う。移植などで離脱しない限りずっと。だから、私には入職してからずっと温かく見守ってくれる人達がいた。そんな人達が、何気なく、時には私を励ますためにかけてくれた「ありがとう」が、今の私を支えてくれている。時には怒られたりもしたけれど、忘れられない言葉を沢山もらった。

私が、その人達に何ができたかは分からないけれど、これからは、私がしてもらったように気持ちに寄り添い、「ここに来て良かった」と思ってもらえるような場所を作って恩返しをしたい。あとは変わらず、やるべきことをやるだけだ。

今までの20年とこれからの私の働き方



どうめい厚木クリニック
診療技術部リハビリテーション科

杉山 恵子

私が入職したのは23年前になります。東名厚木病院、さつきの里あつぎ、どうめい厚木クリニックと、さまざまな環境で患者さんや利用者さんと関わる経験をさせて頂いています。三思会に入職をしようと思ったのは、このようにさまざまな環境の経験ができる法人だからです。また、当法人で働き続けた理由としては、自分がやりたいことに対して、温かく見守ってくれる先輩と、何か悩みがあると相談にのってくれる同僚がおり、人に恵まれていたことにあると思います。

私が今後取り組みたいことは、後輩・同僚がやりがいを持ち、やりたいことが実行できるようなサポートをすることです。また、地域の方々が好きな場所で生活し続けられる手助けができるよう、技術・知識を提供し続け、またその技術・知識は自分にとって最大限のものが提供できるように努力を続けることです。

新型コロナウイルスにより、当たり前と感じていた生活が当たり前でなく変化しています。患者さん・利用者さんも病気・怪我により当たり前のことが変化し、それを受容しながら生活を続けていると思います。私たちもこの変化を受け入れ、今、何ができるのか模索し続けることが重要と考えます。

三思会創立 40 周年記念プロジェクト

ミッション

職員の交流の場を作り、組織力をアップさせる

職員向け 40 周年記念企画として、職員にヒアリングを実施。三思会全 17 施設で働く職員同士で、交流する機会がもっと欲しいということがわかりました。そこで、「三思会の未来を創るための種まき」として、法人の持つ組織力アップを目指し、8 のイベントを企画・実施することにしました。コロナ禍で、実現できることを模索しながら企画・実施をしています。



1

40 周年記念ロゴ公募

三思会職員よりロゴを公募。14 作品が集まり、投票を行いました。投票で決まったロゴにて、ステッカーを作成、全職員へ配布し職員証へ貼り付け。大型マグネットを作成し全社用車へ設置するなど、40 周年のシンボルとして活躍しています。

* ロゴデザイン制作者：目次参照



上位入賞者には表彰式を行いました。



職員配布用ステッカー

2

三思会カレンダー

離れた施設や部署を知るきっかけづくりとして、事業部ごとに職員 40 名の写真を使ったカレンダーを作成。各部署に配布・掲示することで、顔の見える関係の構築や職員間交流へとつながりました。

3

チャレンジ月間

「職員が健康に働けること」をスローガンに、決められたミッション（「減量しよう」「歩こう」）に対して、1 か月間それぞれの目標にチャレンジする。継続することの難しさ・達成した時の達成感を体験することで、患者様や利用者様の気持ちを体験することも。

ご褒美は、カヌー体験！

4

保健指導

職員ドック受診者のうち、年度末 40 歳以上の生活習慣病リスクが高い保健指導対象者に対して、保健指導を実施。保健師と設定した目標を達成した方の中から、抽選で 1 名にランニングシューズを贈呈。人材を人財と考え、生活習慣病リスクの高い職員に対して、生活習慣の改善を促進。10 年後、それ以降も長く三思会で力を発揮できる体に整える。

5

田んぼカカシ看板

東名厚木病院北側の田んぼに、40 周年を PR するカカシを設置。小田急線の乗客に向けて、三思会創立 40 周年をアピールする。



6

文化月間

各施設に訪れた方に 40 周年の感謝の気持ちを作品展を通して伝える。美術・音楽など芸術を通じた職員間コミュニケーションと個性の発掘。

7

職場参観・体験入職

職員の家族やお子さまを対象に、職場参観・体験入職を実施。家族に職場を理解してもらうことで、職員のモチベーションアップにつなげる。

8

運動企画

各事業部対抗 400mリレー & 綱引きの実施。所属事業部の誇りを育み、スポーツを通じたコミュニケーション。所属事業部をアピールする絶好のチャンス！

三思会検定

これであなたも三思会職員になれる？

三思会検定①難易度★☆☆

「三思会」は、なんと読む？

答え

「さんしかい」と読みます。「三思」とは、現在・過去・未来を意味するといわれ、論語の公冶長篇（こうやちょうへん）の中に記述があります。

→詳しくは P5 へ



三思会検定④難易度★☆☆

**三思会の地域貢献である
スポーツ大会の名前は？**

答え

毎年行われている「三思会杯」ですね。

→詳しくは P62 へ

三思会検定②難易度★★☆

三思会の全職員数は？

答え

1240名（2021年6月時点）

→三思会の実績は P10 へ

三思会検定③難易度★★☆

**三思会創立の地である厚木市の
人口はどのくらい？**

答え

22万3,964人（2021年6月1日現在）

借りて住みたい街ランキング1位！

* 2021年 首都圏版 LIFULL HOME'S

三思会検定⑤難易度★★★

**中会長が幼少期を過ごした
瀬戸内海の島はどこ？**



答え

愛媛県四阪島

中会長には40年皆勤賞として、お遍路グッズとトロフィーを贈呈しました。

三思会検定⑥難易度★★★

**日野本部長が、もし20歳に戻れた
としたら、なりたい職業とは？**

答え

飛行機のパイロット

宇宙が好き！でも、宇宙飛行士は怖いそうです。

三思会検定⑦難易度★★☆

**野村理事長が演奏するこちらの
楽器の名前は？**



答え

サクソ（Saxophone）

忘年会でも披露されました。

→詳しくは P46 へ

三思会検定⑧難易度★★☆

東厚会、年に1度の大イベントは？

答え

忘年会

演芸大会、ビンゴ大会、フォトコンテストとイベント目白押しです。



三思会検定⑨難易度★★☆

医療従事者応援として、病院の近くを走る〇〇のイベントが行われました。

**山下名誉院長の趣味でもある
〇〇とは？**

答え

鉄道

子供達を乗せたロマンスカーから、医療従事者へエールを送る「Thank you ロマンスカー」。私たちからも感謝の気持ちを送りました。



三思会検定⑩難易度★★☆

三思会の創立記念日は？

答え

6月1日

今年は理事長・会長講演会が行われ、全職員に洋菓子のお祝品が配布されました。



撮影
アートディレクション+デザイン
吉田貴和子

社会医療法人社団 三思会
創立40周年記念誌 SANSHIKAI
2021年6月1日発行

発行 社会医療法人社団 三思会
40周年記念事業準備委員会
〒243-8571
神奈川県厚木市船子232
TEL 046-229-2221

編集責任者 中正剛

編集者 石綿 祐樹
武尾 竜平
佐伯 健太郎
四元 夏織
杉山 恵子
吉田 貴和子

次号予告
→三思会 創立50周年記念誌
2031年6月発行予定です。



社会医療法人社団 三思会ホームページ
<https://www.tomei.or.jp>



タウンニュース 創立40周年特別号
<https://www.townnews.co.jp/0404/2021/06/04/577664.html>

編集後記

長年やってきた臨床検査技師を引退し、情報デザインを学んで今年春に大学を卒業したばかりの私に課された今回のミッション。グラフィックをやる人にとって本を作ることはとても幸せなことだと教わりましたが、まだ技術も経験もない私にとっては、ほぼゼロからのスタートでした。

まずは三思会の原点を探そうと、過去の資料を読み、会長にもお話を伺いました。そこで三思会を知るには、「少なくとも半分の人のお話を聞かないとダメだね」とアドバイスをいただき、できるだけ多くの方のお話を聞こうと施設を回りました。コロナ禍でイベントがないせいか、写真を撮るだけでも職員の方はとても楽しそうにしていたのが印象的でした。

この記念誌をご覧になった方に、少しでも三思会の「いいね！」が伝われば、今回の私のミッションは成功です。

記念誌作成にご協力いただきました皆様、ありがとうございました。これからも、デザインのかで三思会ファンを増やしていきたいと思っておりますので、応援よろしくお願い致します。

法人本部管理部
海外支援・広報課
吉田貴和子





社会医療法人社団 三思会